

〈資料紹介〉谷崎潤一郎「魔術師」原稿および周辺資料

—— 翻刻・解説

稲垣あやか

「魔術師」は、大正六年一月一日『新小説』第二十二年第一卷（春陽堂）に発表された。本作の執筆原稿は、田鎖数馬氏による『谷崎潤一郎全集 第四卷』^① 解題に「芹屋市谷崎潤一郎記念館に所蔵されている」（五二九頁）と紹介されたことよって、所在が広く知られるようになった。しかしながら、同解題に原稿に関するその他の情報はなく、いまだその全貌は詳らかにされていない。千葉俊二氏監修『別冊太陽 谷崎潤一郎』^②には当該原稿の写真が紹介されているが、作品冒頭の二枚を掲出するにとどまっている。

このたび、記念館の御厚意により原稿を閲覧することがかない、その全葉を確認できた。また記念館には原稿とともに、原稿の表紙、執筆当時の様子を知る人物の回想録、本作の創作ノートとおぼしき紙が各一枚保管されていることも新たに判明した。本稿では、原稿および新資料を紹介することによって、これまで多く語られてこなかった執筆状況の解明に寄与したい。

一、表紙・回想録

閲覧した表紙と回想録はこれまで紹介されておらず、今回の調査によって存在が初めて知られることになった。無罫・無地用紙（縦二五〇ミリ×横一七〇ミリ）に筆書。後述の原稿の大きさに限りなく近い。原稿に付された表紙も同じ大きさになるように裁断されており、中央に縦書きで「谷崎潤一郎氏原稿「魔術師」と筆書されている。これらは谷崎以外の人物によるものと推測できる。

回想録には「源吉識」と署名があり、当時春陽堂に勤め『新小説』の編集を担当していた細田源吉によるものと分かる。⁽³⁾ 署名とともに「昭和十七年十月末」とあることから、作品発表の二十五年後に記された回想録であると推測される。四半世紀が過ぎたのちに顧みた文章という点に留意する必要があるが、谷崎の執筆状況を知る上での大きな手掛かりとなるだろう。

細田によれば、谷崎が本作の筆を執ったのは「大正五年十二月」とのこと。前年に「お艶殺し」⁽⁴⁾ 『中央公論』第三十年第一号（二月一日、中央公論社）「お才と巳之介」⁽⁵⁾ 『中央公論』第三十年第十号（九月一日）などを発表した谷崎を、「新進流行作家として文名轟く」と細田は評しており、『新小説』の依頼によって短編小説を執筆する運びになったという。こうした経緯で書き始められた本作だが、「⁽⁶⁾ 切となりても原稿成らず」とあるように順調に筆が進んだわけではなかったらしい。当初『新小説』編集主任の田中純⁽⁴⁾ が毎日午後⁽⁴⁾ に谷崎の家を訪れ、創作ノートに書かれた本作を原稿用紙に書き写していったことが記されている。その後は細田が筆写の役目を受け、毎日ノートを一、二枚ずつ書き写して完成させたとある。ここから、本作執筆にあたり谷崎が創作ノートを用いていたことが分かる。

大正五年といえ、最初の妻千代との子、鮎子が生まれた年である。⁽⁵⁾ 細田にとっても千代と鮎子の姿は印象に残っ

ていたのか、「赤チヤンを抱ける若き夫人は芸妓なりしとか、二十一二の美しき女なりし」と振り返っている。翌年六月には、千代と鮎子を蛸殻町の生家へ送り出しているため、細田の記憶が正しければ、わずか一年あまりの家族三人暮らしの様子が記された貴重な一文である。また、文中に明記される谷崎邸の住所「小石川区原町」も、弟の精二に宛てた大正五年十二月二十一日付の書簡に記されている住所「小石川原町十三」⁽⁷⁾と一致する。そのほか、谷崎の書齋が二階にあったこと、テーブルや本箱が新しくなったことなど、当時の谷崎邸の様子をうかがい知ることのできる記述が見られる。

二、創作ノート

記念館には、創作ノートとおぼしき紙も一枚保管されている。これも表紙や回想録と同様に、これまで紹介されていない新資料である。タテ罫線入用紙（縦一七〇ミリ×二一〇ミリ）に鉛筆書。ノートの一枚を切り取ったものと見られ、片面のみに記入されている。細田が先の回想録で創作ノートの存在を明かし、「ノートへ書きつづける態、今当余の目裡にあり」と作品を書き進める谷崎の思い出を語っているが、これがそのノートであろう。左上に「27」と番号が打たれており、ノートであるにもかかわらず片面しか使用されていない。この一枚だけでは断定できないが、細田らが筆写するために一枚ずつ切り取っていたとも考えられる。

ノートには二十三行にわたって本作の一部分が書かれている。内容は原稿の八十枚目第四行の行頭から八十二枚目第九行の十五字目までに相当し、細田が代筆した箇所である。ノートと原稿との本文を比較してみると、異同は次の二箇所のみであった。まず、ノートの八行目の「美しさ」が原稿では「美さ」となっている。これは初刊本『人魚の嘆き』（大正六年四月二十日、春陽堂）発行の際に「美しさ」と改められており、誤写であったことがうかがえる。同じく

ノートの八行目「予想してゐた」も原稿では「予想して居た」となっているが、こちらはその後いずれの本文でもそのまま「居る」と表記されている。ノートと原稿との異同が二箇所のみであること、どちらも内容に大きく関わるものではなく、特に後者は細田による表記がのちの本文に踏襲されていることから、細田が忠実に書き写していたことが見て取れる。

谷崎が作品執筆の際に創作ノートを用いていたというのは、昭和四十五年『中央公論』一〇〇〇号に「続松の木影」と題された創作ノートが掲げられたことで知られるようになった。同ノートには、昭和十八年から連載された「細雪」の構想が仔細に記されていた。その後も中村真一郎氏が創作ノート六冊の存在を明らかにする⁽⁹⁾など、谷崎の創作ノートはたびたび話題に上ったが、中でも平成二十七年に「続松の木影」の前冊とされる「松の木影」を撮影した印画紙二五五枚が発見されたことが記憶に新しい。翌二十八年には「松の木影」を含む十一種類の創作ノートが『全集(二十五)』⁽¹⁰⁾に収められた。

谷崎が創作ノートを取り始めた時期について中村氏は、昭和十七年の随筆「初昔」(『日本評論』第十七卷第六、九号)六月一日(九月一日、一元社)の冒頭に「近年物忘れの度がはげしくなつて来たところから時々何かと備忘録に書き留めるやうになつた」⁽¹¹⁾とあるのを引き合いに、「こうしたノートの類の執筆はどうやら晩年にはじまった新しい習慣であるかに思われる」⁽¹²⁾といった見解を示している。千葉氏、荒川明子氏による『全集(二十五)』⁽¹³⁾解題も、創作ノートの作成時期はすべて昭和以降と説いており、最も時期が早いとされる「松の木影」でさえも「春琴抄」のためのメモからはじまり、昭和十三年七月の阪神間の大洪水にいたるまでの期間の創作ノート(七四四頁)と紹介している。

さらに千葉氏は、『日本近代文学館』第二七六号の解題「この一点「松の木影」」に際しても「春琴抄」執筆までは谷崎はノートをとることもなく原稿を書いていたようだ(五頁)と推測している。

つまり、今回確認できた創作ノートは、「春琴抄」発表の昭和八年よりもさらに十七年以上前に、すでに谷崎が創作ノートを用いていたことを示す。これまで「春琴抄」以前の創作ノートは存在が知られていないが、本ノートの存在によって、谷崎が創作ノートを取り始めた時期について新たな見方ができるようになった。しかしながら、細田がノートに書かれた文章を「下書き」と呼んでいるように、本ノートに書かれた本文は限りなく完成形に近いものであり、「松の木影」や「続松の木影」のような構想を練った形跡は見られない。この点に鑑みれば、これまでに発見された創作ノートとは多少性質を異にするだろう。ただし、本作の創作ノートが確認できたことによって、少なくとも大正期の谷崎が原稿執筆の前にノート上で推敲を重ねていたことが分かった。

三、原稿

以上の周辺資料を整理した上で、原稿についても言及したい。原稿用紙は松屋製二〇〇字詰め洋紙（縦二四八ミリ×横一七二ミリ）でペン書。一〇八枚すべてが記念館に現存する。これは、本作と同日に発表された「人魚の嘆き」〔中央公論〕第三十二年第一号の初稿や翌年の「兄弟」〔中央公論〕第三十三年第二号（大正七年二月一日）を著した原稿用紙と同じものである。¹⁴

タイトルは「魔術師 A Poem in Prose.」とあり初出『新小説』と一致しているが、原稿には「——散文詩——」という初出には見られない副題が付いている。原稿上にこの副題を削除した形跡がないため、どの段階ではずすことになったのか、現段階では解き明かすことはできない。だが、代わりに『新小説』目次には「魔術師（散文詩）」とあり、この副題のために小説ではなく散文詩というジャンルとして掲載された可能性が指摘できる。「A Poem in Prose.」が初刊の際にはずされたことは『全集（四）』解題に記されている通りだが、この「——散文詩——」もまた、のちに引

き継がれなかった副題である。

途中書き手が三度交代しており、交代箇所にはそのことを示す付箋が貼られている。初めに書き手が代わったのは八枚目の冒頭で、付箋には「ここより谷崎氏に代はりて田中純筆記す」とある。さらに、十八枚目の第六行には「ここより谷崎氏のノートにつきて源吉が筆写したり」と、八十五枚目冒頭には「ここより又谷崎氏自身執筆されたり」と注記される。谷崎から田中へ、田中から細田へ、そして細田から谷崎へ、といった筆記者の変遷は、細田の回想録での叙述と一致している。

本原稿には多くの加筆が見られ、前章で見たように代筆者が忠実に創作ノートを書き写していたと仮定すれば、原稿用紙上での書き換えは谷崎による新たな推敲箇所となる。そこで誤字の訂正や脱字の挿入などを除いた加筆を数えてみたところ、その数は一二三箇所¹⁵に上った。書き込みの筆跡が谷崎の自筆箇所のもので非常によく似ていることから、これらの推敲の跡は谷崎の手によって加えられたと見て問題ないだろう。また、〈資料3-2〉「書き換え箇所一覧表」の通り加筆箇所は初出である『新小説』の本文に漏れなく反映されている。ここから、加筆後の本文を本作の完成稿として位置付けられる。

推敲箇所を詳しく見てみると、読み方は変えず漢字のみの変更が五箇所¹⁶あるものの、それ以外はすべて語句そのものを書き換えている。その中でも、作品世界の雰囲気に関わる変更が目立つ。例えば、「大通り」を「アゼニユウ」(6)と、「曲芸師」を「チャリネ」(36)と、というように、街の様子を表す描写を意味の近しい西洋の言葉に言い換えた箇所がある。そのほかにも、作品舞台である公園がどんな場所であるかを説明する際に喩えられた活動写真の作品名が「Zigomar」から「Fantouma」(10)へ変わっていたり、¹⁷魔術師が魔術を演じている小屋の外観が「印度更紗の幕」から「冷い鉄の門」(30)になっていたりするのも、作品世界の雰囲気をつくり上げるために加えられた書き換

えと言えるだろう。このように、推敲箇所をひとつずつ検討していくことによって、谷崎が「魔術師」という作品をどのように描こうとしていたのか、作者の創作意図をうかがうことができよう。推敲箇所の検討と、それを踏まえた本作の作品検討については、別途機会を改めたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、資料掲載のご快諾と多大なご協力を賜りました芦屋市谷崎潤一郎記念館、学芸員の井上勝博氏に心より感謝申し上げます。

注

- (1) 平成二十七年十一月十日、中央公論新社。以下同書を『全集(巻数)』と略記する。なお、本稿では引用に際して字体を通行のものに改めている。
- (2) 平成二十八年一月二十五日、平凡社。六十六頁。
- (3) 臼井吉見氏著『現代日本文学全集 85』(昭和三十二年十二月二十日、筑摩書房)年譜四二七〜四二八頁によれば、細田は大正四年に早稲田大学を卒業したのち、同年十二月春陽堂編集部に入り、『新小説』の編集を担当していた。
- (4) 同右四二三頁によると、細田と同じく大正四年に春陽堂へ入社し、『新小説』編集長に就任した。
- (5) 大正五年の随筆「父となりて」(『中央公論』第三十一年第五号(五月一日))に、「去る三月十四日に始めて子供の父となった」(『全集(九)』(平成二十九年二月十日、四五一頁))とある。
- (6) 大正六年六月十二日に「十四日にお千代と赤ん坊とを蛸殻町の方へやる事にした」(『谷崎潤一郎全集 第二十五卷』(昭和

五十八年九月二十五日、中央公論社」四十三頁）といった書簡を弟である精二に宛てている。

(7) 同右四十二頁。

(8) 昭和四十五年十二月一日、中央公論社。

(9) 「谷崎潤一郎の創作ノート」(『中央公論文芸特集』(昭和五十九年十月二十五日、中央公論社))。

(10) 平成二十八年九月十日。

(11) 『全集(十八)』(平成二十八年五月十日)三五九頁。

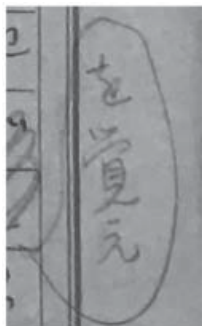
(12) 「谷崎潤一郎の創作ノート」七十一頁。

(13) 平成二十九年三月十五日、日本近代文学館。

(14) 橘弘一郎氏が『谷崎潤一郎先生著書総目録 第壹巻』附記四頁(昭和三十九年七月二十四日、ギャラリー吾八)に、「人魚の嘆き」初稿(四頁)と「兄弟」(六頁)の原稿用紙について、写真とともにいずれも「松屋製原稿用紙」「二百字詰」と紹介している。また、「人魚の嘆き」初稿は現在日本近代文学館に所蔵されており、全葉を確認した千葉氏が、八枚すべての写真を『ユリイカ』第三十五卷第八号(平成十五年五月一日、青土社)に掲載している。

(15) 原稿に施された加筆が谷崎の手によるものと示すために、加筆と同じ文字を原稿内から抽出した。加筆箇所の写真の下に、①谷崎②田中③細田の順でそれぞれ列举する。今回は「覚え」「でせう」「ました」の三つを比較したが、いずれも谷崎の執筆箇所の文字が加筆の筆跡と似ていることが分かる。なお、引用元を(枚数・行数)といったように注記している。

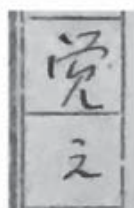
・「覚え」(39-1)



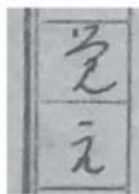
①谷崎(1-6)



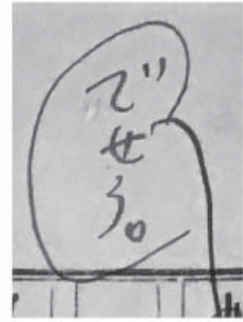
②田中(8-10)



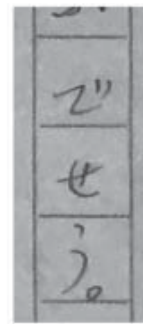
③細田(40-10)



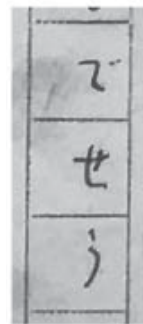
・「でせう」(47-1)



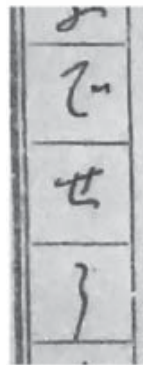
①谷崎(5-2)



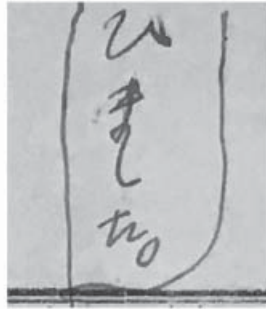
②田中(11-6)



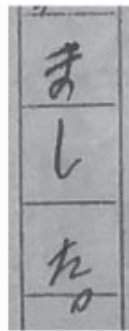
③細田(42-10)



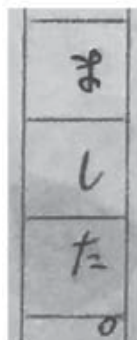
・「ました」(47-7)



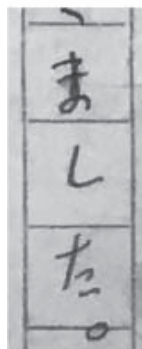
①谷崎(93-9)



②田中(11-4)



③細田(37-2)



(16) 〈資料3-2〉「書き換え箇所一覧表」の通し番号1、2、5、32、108の書き換えが当てはまる。以下の当「解説」本文に於いては、括弧内に「書き換え箇所一覧表」該当する数字を付す。

(17) 田中純一郎氏『日本映画発達史Ⅰ 活動写真時代』(昭和五十五年二月二十日、中央公論社)によれば、「Zigomar」は明治四十四年十一月十一日より浅草の金竜館にて上映され、「Fantouma」は大正四年五月九日、浅草電気館にて上映が開始された。なお、「Fantouma」のスペルは本来「Fantomas」であるが、原稿を含めすべての本文で「Fantouma」と誤記されている。

(本学大学院研修者)

【凡例】

一、各行頭の算用数字は行の移りを表す。
一、資料の様相をそのまま提示するため、字体や仮名遣いなど可能な限り原文の表記に従った。

- 1 谷崎潤一郎作「魔術師」原稿
- 2 大正五年十二月の事なり、当時新進流行作家として
- 3 文名轟く谷崎氏は、「新小説」の注文により短篇を執筆
されたり。折柄、切となりても原稿成らず、編輯主任の田
中純、毎日午後出かけて谷崎氏の下書きを筆写し、つひにそ
の役目か源吉の方へ廻はり、毎夕小石川区原町の谷崎氏方へ
出かけ、氏のノートを一二枚つづつづ筆写し夜十時十一時になりて
帰宅したり、数日かくしてこの作なれり、谷崎氏は新婚生活の
初年か二年目なり。赤チヤンを抱ける若き夫人は藝妓なりしと
か、二十一二の美しき女なりし、後年この夫人は佐藤春夫氏方に
貰はれたり、思へば二十七八年の昔なり。潤一郎氏の書齋は二階
にて、テーブル、本箱、共に新調にて流行児のちやきくなる氏
- 12
- 11
- 10
- 9
- 8
- 7
- 6
- 5
- 4
- 3
- 2
- 1

16 15 14 13

は、こつくと鉛筆を鳴しつゝノートに書きつゞける態、今当余
の目裡にあり、この原稿、中途より筆の代はれるは田中純、更に
その後は源吉、而して更に85枚目よりは谷崎氏の筆なり、
實に懐旧の情に堪へず
昭和十七年十月末 源吉識

【凡例】

一、各行頭の算用数字はノートの行数を表す。

一、資料の様相をそのまま提示するため、字体や仮名遣いなど可能な限り原文の表記に従い、表示できない文字には

●を置いた。ルビに関しても同様にそのまま記した。

一、創作ノート上の推敲箇所に関して、一重あるいは二重線で消され下の文字が判読可能な箇所を「見せ消ち」とし、塗りつぶすように消され下の文字に判読不能な部分が多い箇所を「抹消」といったように分類することによって再現した。どちらとも取れる箇所もあるが、稿者の判断によって分類した。細部については、写真版を参照いただきたい。

一、見せ消ち・抹消箇所には文字の上から取り消し線を重ね、加筆された箇所は「」の中に記した。なお、抹消箇所

の文字を網掛けし、見せ消ち箇所との区別を図った。

一、判読不能の箇所には□を置いた。

一、原稿との異同箇所には二重傍線を付した。

1 私は、菓の魔術師が□滑かに〔□諄々として〕語り□□續ける〔滑かな〕言葉□よりも、寧ろ彼の艶冶を極めた優婉な容貌と姿態とに、いつ迄もいつ迄も惚として眺め入りました。艶冶な眉目と●〔阿〕娜たる〔風〕姿態〔と〕に心を奪はれ、

※●は、女へん十阿

- 4 いつ迄もいつ迄も恍惚として「、」眼を睜みはらすには居られませんでした。
- 5 非凡彼が非超凡の美貌を備へた青年である事から「て居る事」は、前から聞いて居たのですが、其れにしても私は彼に今更今、話に依つて□
- 6 豫想してゐた「彼の」顔よりも立ちより「も、」も十倍十倍も二十倍も勝つた
- 7 数十倍段立ちと□「、」彼の実際の輪廓と「を比較して、」□美しさの程度に格段の
- 8 徑庭を□持つ相違の「が」ある「つた」「る」事を認めただけです「ました」。就中、一番
- 9 私の意外に感じたのは、うら若い男子だとのみ思つて居た其
- 10 の魔術師□□□が、男であるやら女であるやら容易に全く區別
- 11 の付かない事です。女に云はせれば、彼は絶世の美男だと云ふでせう。
- 12 けれども男に云はせ□□「たら、」或は曠古の美女だと云ふかも□知れません。「私は」彼の
- 13 の骨格、筋肉、動作、音聲の凡べての部分に、男性「的」の高雅と女性
- 14 □□智慧と□□精悍「活潑」と「が、」女性「的」の優婉と軟「柔」媚と優婉と狡猾と「繊細と」陰險
- 15 と□との間に、渾然として融合□されて居るのを見
- 16 ました。たとへば髪彼の房々とした栗色の髪の毛や、ふつくらとした
- 17 豊瓜実顔の豊頬や、なまやかに□「眞紅な小さい唇や、」優婉にして而も精悍な手足
- 18 の恰好や、其れ等の一點一劃にも、□□□□
- 19 の性的特張が、□□面なども頗る顯著に□□包含されてゐる□□
- 20

- 21 のです。頗る織り込まれて、此の不思議「微妙」なる調和の現れて□□
- 22 「の」存在して居る工合は、ちやうど十五□六歳の、性的特張が
- 23 まだ充分に發達して居ない美少年の□少女「少女」或は少年の体質

〈資料3-1〉「原稿」翻刻

【凡例】

- 一、資料の様相をそのまま提示するため、字体や仮名遣いなど可能な限り原文の表記に従い、表示できない文字には●を置いた。ルビに関しても同様にそのまま記した。
- 一、加筆後の本文を完成稿と見なした。
- 一、書き換えられた箇所を明確にするために加筆部分は傍線で示し、元あった語句は【○○】といったように該当箇所
所に記すこととする。なお、誤字の訂正は加筆箇所を含めていない。
- 一、（ ）内の数字は、〈資料3-2〉「書き換え箇所一覧表」の通し番号に対応している。
- 一、原稿の各用紙の末尾に当たる箇所には閉じるカギ括弧（ ）を挿入し、例えば一枚目であれば「1といったように算用数字で何枚目であるかを示した。
- 一、翻刻内の改行および行の移りはすべて原稿用紙に依っており、各行頭の算用数字は原稿用紙の行番号を表す。
- 一、翻刻内の（ ）は原稿に記された改行等の指示に付した。原稿には括弧は付されておらず、改行は「改行」、追

込みは「ツヅク」、空き行は「二行アケ」などというように指示されている。

一、八十五枚目以降は、谷崎が原稿上で推敲を重ねながら書き進めており、文の途中で書き換えられている箇所がある。判読し得る限り忠実に翻刻し、判読不能の箇所には□を置いた。

一、八十五枚目以降の推敲箇所に関して、一重あるいは二重線で消され下の文字が判読可能な箇所を「見せ消ち」とし、塗りつぶすように消され下の文字に判読不能部分が多い箇所を「抹消」といったように分類することによって再現した。どちらとも取れる箇所もあるが、稿者の判断によって分類した。

一、見せ消ち・抹消箇所には文字の上から取り消し線を重ねた。なお、抹消箇所の文字を網掛けし、見せ消ち箇所との区別を図った。ただし、これらは代筆者の担当箇所に施された加筆とは性質が異なり、むしろ創作ノート上の加筆に近いと判断し、「書き換え箇所」の数には含めていない。

一、本原稿には語句あるいは文の脱落箇所がある。それらは次行で補われ正しい箇所への挿入が指示されている。抜け落ちた語句を「」内に記し、元あった箇所には■を置いた。なお、五十五枚目第七行、五十六枚目第十行、五十八枚目第五行、九十八枚目第一行の四箇所に関しては、抜け落ちた語句や文を欄外にて補っている。そのため元あった箇所は示さず、そのことを翻刻内に注記している。

一、書き手の交代を示す付箋については、該当箇所に付箋の文言を記し、本文と区別するために□で囲った。

一、創作ノートの本文と比較しやすいように、対応する箇所は太字ゴシック体で表し、異同には二重傍線を付した。

一、四十六〜四十七枚目をまたぐ文に脱字が見られるため、初出の本文に鑑みて稿者が言葉を補い、≪≫内に記した。

1 魔術師 A poem in prose.

2 谷崎潤一郎

3 — 散文詩 —

4 私わたしがああの魔術師まじゆしに「會かい」【遭あ（1）】つたのは、何處いづこの国の

5 何と云ふ町であつた（會）■か、今ではハツキリと

6 覚えて居ません。——どうかすると、其

7 れは日本の東京のやうにも思はれますが、或

8 る時は又南洋や南米の殖民地であつたやうな、

9 或は支那か印度辺の船着場ふなつきばであつたやうな気

10 もするのです。兎にも角にも、其れは文明の「1

1 中心地たる欧羅巴からかけ離れた、地球の片かた

2 隅すみに位して居る國の都で、而も極めて殷富な

3 市街の一廓の、非常に賑やかな夜よるの巷ちやうでした。

4 しかしあなたが、其の場所の性質や光景や●

※●は、くにながまえ十分

5 圍氣いけに関して、もう少し明瞭な觀念を得た

6 いと云ふならば、まあ私は手短かに、浅草の

7 六区むくわに似て居る、あれよりもつと不思議な、

- 8 もつと乱雑な、さうしてもつと頹爛した公園
- 9 であつたと云つて置きませう。
- 10 若しもあなたが、浅草の公園に似て居る」2
- 1 と云ふ説明を「聞」【聴(2)】いて、其處に何等の美しさを
2 も懐なつかしさをも聞感ぜず、寧ろ不愉快な、汚穢
- 3 な土地を連想する「やう(3)」なら【ば(3)】、其れはあなたの『美』
4 に対する考へ方やう■が、私とまるきり違つて
- 5 居る結果なのです。私は勿論、十二階の塔の
6 下の方に棲んで居る、“venal nymph”の一群
7 をさして、美しいと云ふではありません。
- 8 私の云ふのは、あの公園全体の空氣の事です。
- 9 暗黒な洞窟を裏面に控へつゝ、表へ廻ると常
10 に明あかるい歡ばしい顔つきをして、好奇な大膽」3
- 1 な眼を輝かし、夜な夜な毒々しい化粧を誇つ
2 て居る公園全体の情調を云ふのです。善も悪
3 も、美も醜も、笑ひも涙も、凡べての物を溶
4 解して、ますく巧眩へいけんな光を放ち、炳へいけん絢な
5 色を湛へて居る偉大な公園の、海のやうな

- 6 壯観を云ふのです。さうして、私が今語らう
- 7 とする或る国の或る公園は、偉大と混濁と【複雑(4)】の點
- 8 に於いて、六区よりも更に一層六区式な、怪
- 9 異な殺伐な土地であつたと記憶して居ます。(別行)
- 10 浅草の公園を、鼻持ちのならない俗悪な場」4
- 1 所だと感ずる人に、あの国の公園を見せた
- 2 なら果して何と云ふでせう。其處には俗悪以
- 3 上の野蠻と不潔と潰敗とが、溝の下水の澱ん
- 4 だやうに堆積して、晝は熱帯の白日の下に、
- 5 夜は煌々たる燈火の光に、耻づる色なく發き
- 6 曝され、絶えず蒸し蒸しと悪臭を發酵させて
- 7 居るのでした。けれども、支那料理の皮【鷺(5)】蛋の
- 8 旨さを解する人は、暗綠色に腐り壞れた鷺の
- 9 卵の、胸をむかむかさせるやうな異様な匂を
- 10 掘り返しつゝ、中に含まれた芳鬱な渥味に舌」5
- 1 を鳴らすと云ふ事です。私が初めてあの公園
- 2 へ這入つた時にも、ちやうど其れと同じやう
- 3 な、薄気味の悪い面白さに襲はれました。

- 4 何でも其れは初夏の夕べの、涼しい風の吹
- 5 く時分だったでせう。私が其の町のとある料
- 6 理屋で、私の戀人と楽しい會合を果たした後、
- 7 互ひに腕を組み合つて、電車や自動車や人力
- 8 車の繁く行き交ふアエニユウ【大通り(6)】を、睦
- 9 しさうに散歩して居る最中でした。
- 10 「ねえあなた、今夜此れから公園へ行つて見」6
- 1 ようではありませんか。」
- 2 と、彼の女が突然、あの妖艶な大きな
- 3 瞳をぱつちりと【慵げに(7)】開いて、私の耳元で囁いたのです。〈別行〉
- 4 「公園？ 公園に何があるのさ。」
- 5 と、私は少し驚いて尋ねました。なぜと
- 6 云ふのに、私は今迄、其の
- 7 町にそんな公園のあつた事を知らなかつたの
- 8 みならず、その時の彼の女の言葉には、何處
- 9 となく胡散臭い調子が潜んで居て、云はゞ
- 10 秘密な悪事でも唆かすやうに聞えたからです。」7

ここより谷崎氏に代はりて田中純筆記す

- 1 「だつてあなたはあの公園が大好きな筈ぢやありませんか。私は初めあの公園が非常に恐ろしかったのです。娘の癖にあの公園へ足を踏み入れるのは、恥辱だと思つて居たのです。其れがあなたを恋するやうになつてから、いつしかあなたの感化を受けて、あゝ云ふ場所に云ひ知れぬ興味を感じ出しました。あなたに会ふ事が出来ないでも、あの公園へ遊びに行けば、あなたに会つて居るやうな心地を覚え始めました。……………あなたが美しいやうにあの公園は美しいのです。あなたが物好きであるやうに、あの公園は物好きなのです。あなたはよもやあの公園を、知らない筈はないでせう。」
- 2 「おゝ知つて居る、知つて居る。」と、私は思はず答へました。さうして更に斯う云ひました。「……………彼処にはたしかいろいろな、

- 8 珍しい見せ物があった筈だ。世界中の奇蹟と
- 9 云ふ奇蹟の凡てが集まつて居た筈だ。彼処
- 10 には古代の羅馬に見るやうな、アムフィシア」9
- 1 タアもあるだらう。スペインの闘牛もあるだ
- 2 らう。其れよりもつと突飛【強烈（8）】な、もつと妖麗な、【もつと凄惨な、（9）】
- 3 Hippodrome もあるだらう。それから私の大
- 4 好きな、いとしい可愛いお前よりも尚大好き
- 5 な活動写真があるだらう。さうして彼の、世
- 6 界中の人間の好奇心を唆かした Fantouma 【Zigomar（10）】や
- 7 Protea よりも、【一層兇暴な悪漢や、一層嬋
- 8 麗な毒婦たちの、（11）】身の毛の竦つやうなフィルムの【犯罪の（12）】
- 9 数々が、白昼の幻まぼろしの如くまざま
- 10 ざと映されて居るだらう。」10
- 1 「私は此の間、彼処の活動写真館で、あ
- 2 なたが平生耽読して居る古来の詩人藝術家の、
- 3 名高い詩篇や戯曲の映画を幾巻も幾巻も見せ
- 4 られました。ホオマアのイリアッドだの、ダ
- 5 ンテの地獄の写真などは、あなたも多分御存

- 6 じでせう。しかしあなたは、支那小説の西遊
- 7 記の、西梁女国の艶魔の媚笑【媚態（13）】を御覧になつた
- 8 事がありませうか。又アメリカのポオの作つ
- 9 た、恐怖と狂想と神秘との、巧緻な糸で織り
- 10 なされた奇あやしい幾個の物語が、フィルムの上」11
- 1 に展開して、眼前に現れて来る凄じさを、嘗
- 2 て想像した事があるでせうか。【“The murders in
- 3 the Rue Morgue”の中に描かれた猛獣の動作が、
- 4 生き生きとした絵画となつて事実そのまゝ
- 5 に演ぜられる光景を、ちよつとでも考へて御
- 6 覧なさい。或は（14）】“The Black Cat”の戦慄すべき地
- 7 下室の情況や、“The Pit and the Pendulum”の暗澹
- 8 たる牢獄の有様が、小説よりも更に無氣味に、
- 9 実際よりも更に鮮やかに、強く明るく照し出
- 10 される刹那の氣持ちを味はつて御覧なさい。」12
- 1 而も【さうして（15）】其れ等の幻燈劇を、黙つて静かに見
- 2 物して居る数百人の観客は、みんな悪夢に魘うな
- 3 されたやうにビツシヨリと冷汗を掻き、女

4 は男の腕に絡まり【手を「捕」へ（16）】男は女の肩にしがみ着いて、【を抱いて、（17）】歯を
5 喰ひしばつ■ておのゝきながら、「二心に●拗に、」昂奮した怯

※●は、手へん十執

6 えた瞳を、
（一心に●拗に、）■映画の上へ注いで

7 居るのです。彼等は折々、熱に浮かされた病

8 人のやうな微かな嘆息を洩らすばかりで、咳

9 一つ、眼瞬き一つしようとする者は居ません

10 でした。そんな事をする隙のない程、彼等の「13

1 魂は驚異に充たされ、彼等の体は硬直して居

2 るのです。たまく餘りの明白【生々し（18）】さに堪へか

3 ねて、面を背けて逃げ出さうとする者がある

4 と、眞暗な観客席の何処からともなく、氣違

5 ひじみた、けたゝましい拍手の声がかかります。

6 すると拍手【其の声（19）】は忽ちの間に四方へ●漫し、内

※●は、さんずい十弥

7 内浮き腰になつて居た連中迄が相和して、館

8 の建物を震撼するやうな盛んな響きが、暫く

9 場内にどよめき渡【いて居（20）】るのです。……」

- 10 彼の女の語る挑発的な巧妙な叙述は、一」14
- 1 言一句大空の虹の如く精細に、【鮮かに、(21)】明瞭な幻影を
- 2 私の胸に呼び起して、私は話【言葉(22)】を聴いて居る
- 3 より、寧ろ映畫を見て居るやうな眩ゆさを感じ【心地がし(23)】ま
- 4 した。同時に私は、其の公園へ今迄何度も訪
- 5 れたことがあるらしく感ぜられました。少く
- 6 とも彼の女が見物したと云ふ其れ等の幻燈の
- 7 数々は、私の心の壁の面おもてに、妄想ともつかず
- 8 写真ともつかず、折々朦朧と浮かび上つて私の
- 9 注視を促すことは屢々あるの【事実なの(24)】です。
- 10 「しかし恐らく彼の公園には、もつと鋭く」15
- 1 われ／＼の魂を脅おびやかし、もつと新しくわれ
- 2 われの官能を蠱惑する物があるだらう。――
- 3 物好きな私が、夢にも考へたことのない、
- 4 破天荒な興行物があるだらう。私には其れが
- 5 何だか分らないが、お前は定めし知つて居る
- 6 に違ひない。【咎だ。(25)】
- 7 「さうです。私は知つて居ます。其れは此

- 8 の頃公園の池の汀に小屋を出した、若い美しい魔術師です。」
- 9 と、彼の女は即座に答へました。」^{すどほ}16
- 1 「私は度び度び其の小屋の前を素通りしましたが、【通つて、毒々しいペンキ絵の、魔術の看板を見に来るばかりで、(26)】まだ一遍も中へ(27)這入つたことがないので、其の魔術師の姿と顔とは、餘りに眩く美しく、恋人を持つ女の身には、近寄らぬ方が安全だと、町の人々が云ふ【に云はれた(28)】のです。其の人の演ずる魔法【術(29)】は、怪しいよりもなまめかしく、不思議なよりも恐ろしく、巧緻なよりも奸悪な妖術だと、多くの人は噂して居ます。
- 10 けれども小屋の入口の、冷い鉄の門【印度更紗の幕(30)】をくぐつて、一度魔術を見て来た者は、必ずそれが病み付きになつて毎晩出かけて行くのです。どうしてそれ程見に行きたいのか、彼等は自分でも分りません。きつと彼等の魂までもが、魔術にか「けられ」てしまふのだら

ここより谷崎氏のノートにつきて源吉が筆写したり

- 6 うと私は推量し^(けられ) ■■■て居るのです。――です
- 7 があなたは其の魔術師をまさか恐れはしない
- 8 でせう。人間よりも鬼魅を好み、現実よりも
- 9 幻覚に生きるあなたが、評判の高い公園の魔
- 10 術を見物せずには居られないでせう。たとへ」 18
- 1 いかなる辛辣な呪咀や禁厭^{まじなひ}を施されても、戀
- 2 人のあなたと一緒に見に行くのなら、私も決
- 3 して惑^{まじ}はされる筈はありません。：」
- 4 「惑はされたら惑はされるがいゝぢやないか。
- 5 其の魔術師がそんなに綺麗な男なら。」
- 6 私は斯う云つて、春の野に啼く雲雀のやう
- 7 に、快濶な声でからからと笑ひました。しか
- 8 し其の次ぎの瞬間には、ふと、胸の底に湧い
- 9 て来た淡い不安と軽い嫉妬に裏切られて、早
- 10 速言葉を荒らげずには居られませんでした。」 19
- 1 「それでは此^これから直ぐ公園へ行つて見よう。
- 2 われ／＼の魂が魔法にかゝるかかゝらないか、

3 お前と一緒に其の男を試してやらう。」

4 二人はいつか町の中央にある廣小路の、大
5 噴水の澁をさまよって居たのでした。噴水の
6 周囲には、牛乳色の大理石の石垣が冠のやう
7 な円形を作つて、一間毎に立つて居る女神の
8 像の足下から、泉の水は淙々として溢れ脹ら
9 み、絶えず大空の星を目がけて吹き上げなが
10 ら、アーク燈の光のうちに虹霓となり雲霧と」
20

1 となりつゝ、夜の空氣に潺湲と涸び泣いて居
2 るのです。とある行路樹の、鬱蒼とした葉蔭
3 のベンチに腰を卸して、暫く街頭の人ごみを
4 眺めて居た私は、間もなく其處の雜沓に異常
5 な現象が行はれて居る事を発見しました。町
6 の四方から、其の四つ辻の噴水に向つて集ま
7 つて来る四條の道路は、いづれも夕方のそゞ
8 ろ歩きを楽しみむらしい群衆に依つて賑はつて
9 居ますが、而も其れ等の人々の殆んど全部は、
10 一様に同じ方角を志しつゝゆるくなだらか」
21

- 1 に流れて行くのです。南と北と西と東との道
- 2 路のうち、南の一条を除く以外の三つの線を
- 3 歩く者は、一旦悉く四つ辻の廣場に落ち合つ
- 4 た後、今度は更に濃密な隊を作り、眞黒な太
- 5 い列を成して、南の口へぞろぞろと押して行き
- 6 ます。さうして今しも、噴水の傍そばのベンチに憩
- 7 うて居る私等二人は、云はゞ大河たいがのまん中に
- 8 滯滞して居る浮き洲のやうに、独り静かに周
- 9 囲から取り残されて居るのです。
- 10 「御覧ごらんなさい。これ程多勢ほどの人たちがみんな」
22
公園へ吸ひ寄せられて行くのです。——さあ、
- 2 われ／＼も早く出掛けませう。」
- 3 彼の女かじよは斯う云つて、やさしく私の背中を
- 4 擁して立ち上りました。二人はどんなに押し
- 5 返されても別れ別れにならないやうに、鉄の
- 6 鎖の断片の如く頑丈に腕を絡み合つて、人ご
- 7 みの内に交つたのです。
- 8 やゝ長い間、私は唯、無数の人間の雲の中を

- 9 嫌應^{いやおう}なしに進みました。行く手を眺めると、
- 10 公園は案外近い所にあるらしく、燦爛とした」 23
- 1 イルミネエションの、青や赤や黄や紫の光芒
- 2 が、人々の頭に焦げつく程の低空に、炎々と
- 3 燃え輝いて居るのです。【此の騒擾に充たされ
- 4 て居る(31)】道路の両側には、青樓とも料理屋とも
- 5 つかない三階四階の樓閣が並んで、花やかな
- 6 岐阜提灯を珊瑚の根掛けのやうに連【列(32)】ねたバル
- 7 コニイの上を見ると、酔ひしれた男女の客が
- 8 狂態の限りを盡して野獸のやうに暴れて居ま
- 9 した。彼等の或る者は、街上の群集を瞰おろ
- 10 して、さまざまの悪罵を浴びせ、冗談を云ひ」 24
- 1 かけ、稀には唾を吐きかけます。彼等はいづ
- 2 れも外間を忘れ羞耻を忘れて踊り戯れ、馬鹿
- 3 騒ぎの揚句には、菑蕩のやうにぐたぐたにな
- 4 った男だの、阿修羅のやうに髪を乱した女だ
- 5 のが、露臺の欄杆から人ごみの上へ眞倒まに
- 6 落ちて来るのです。さうして見る見る野次馬

7 のために、顔を滅茶滅茶に掻き捲られ、衣類
8 をずたずたに引き裂かれて、或る者は悲鳴を
9 放ちながら、或る者は絶息して屍骸のやうに
10 なりながら、水に浮かぶ藻屑の如く何處まで」 25

1 も何處までも運ばれて行くのです。私は、自
2 分の前へ落ちて来た一人の男が、逆立ちにな
3 つて二本の脛を棒杭のやうに突き出したまゝ、
4 止めどもなく流れて行くのを見て居ました
5 。其の男の足は、四方八方から現れて来る無
6 頼漢の手に依つて、最初に先づ靴を脱がされ、
7 次にはズボンをぼろぼろに破られ、果ては
8 靴足袋を剥ぎ取られて、打つたり抓つたりさ
9 れるのでした。それから又、酒ぶくれに太つ
10 た一人の女が、ギオ●ンニ、セガンテイニの」 26

※●は、ワ+濁点

1 「宿業の報い」と云ふ繪の中にある人物のやう
2 な形をして、胴上げにされながら、「やつしよ
3 い、く」と擔がれて行くのも見物しました。

4 「この町の人たちは、みんな氣が違つて居るやうだ。今日は一体、お祭りでもあるのか知ら。」

7 と、私は戀人を顧みて云ひました。

8 「いゝえ、今日ばかりではありません。此の公園へ来る

9 【町の(33)】人は年中こんなに騒いで居るのです。始

10 終此のやうに酔拂つて居るのです。此の往来」 27

1 を歩いて居る人間で、正氣な者【静かなの(34)】はあなたと私ばかりです。」

3 彼の女は相変らずしとやかな、眞面目な句調

4 で、そつと私に告げました。どんな喧囂の巷

5 に這入つても、どんな乱脈な境地にあつても、

6 常に持ち前の心憎い沈着と、純潔な情熱と

7 を失はない彼の女は、悪魔の一團に圍かこまれた

8 唯一たった一人の女神のやうに、清く貴く私の眼に映

9 じたのです。私は彼の女の冴え冴えとした瞳

10 を見ると、吹き荒ぶ嵐の中に麗朗と澄み渡つ」 28

1 た、鏡のやうな秋の空を連想せずには居られ

- 2 ませんでした。
- 3 二人は人波に揉まれ揉まれて、一尺の地を
- 4 一寸づゝ歩く程にして、つい鼻先に控へて居
- 5 る公園の入口へ、漸く辿り着く迄に一時間で
- 6 上も費したやうでした。へッ、く
- 7 其處までぎつしりと密集して、巨大の蜈蚣むかで
- 8 の這ふが如く詰め駈けて来た人々は、門内の
- 9 廣場に達すると、やがて参々伍々に別れて、
- 10 思ひ思ひの方面へ散らばつて行くのです。公二 29
- 1 園と云つても、見渡す限り丘もなく森もなく、
- 2 人工の曲致を悉した奇怪な形の大夏高樓が、
- 3 フェアリー、ランドの都のやうに薨を連ね、
- 4 幾百万粒つぶ【點(35)】の燭を點じて、巍々として聳えて
- 5 居るのでした。廣場の中心に茫然とイ立した
- 6 まゝ、其の壯觀を見渡した私は、先づ何より
- 7 も、天の半ばに光つて居る Grand Circus と云ふ
- 8 廣告燈のイルミネーションに膽を奪はれました。
- 9 其れは直徑何十丈あるか分らない極めて膨大

- 10 な観覧車の如きもので、ちやうど車の軸のと」 30
- 1 ころに、グラウンド、サアカスの二字が現れて
- 2 ゐるのです。さうして、數十本の車の輻やには、
- 3 一面の電球が赫燦たる光箭くわうせんを放ち、さなが
- 4 ら虚空に巨人の花傘を擴げたやうな環くわんを描い
- 5 て、徐々に雄大に廻轉を續けて居ます。而も
- 6 一層驚く可き事は、素肌すはだも同然な肉体に輕羅
- 7 を纏うた數百人のチャリネ【曲藝師（36）】の男女が、炎々と輝
- 8 く火の柱に攀ち登りつゝ、車の廻るに従つて、
- 9 上方の輻やから下方の輻やへと、順次に間断な
- 10 く飛び移つて居る有様です。遠くから其れを」 31
- 1 眺めると、車輪全体へ鈴なりにぶら下つて居
- 2 る人間が、火の子の降るやうに、天使の舞ふ
- 3 やうに、衣ころもを翩々と翻して、明るい夜の空を
- 4 翱翔こうしやうして居るのでした。
- 5 私の注意を促したのは、其の車ばかりでな
- 6 く、殆んど公園の上を蓋うて居る天空のあら
- 7 ゆる部分に、奇怪なもの、道化たもの、妖麗

- 8 なものゝ光の細工が、永劫に消えぬ花火の如く、
- 9 蠢^{うごめ}き、閃^{きら}めき、のたくつて居るのを認め
- 10 ました。若しあの空の光景を、兩國の川開き」 32
- 1 を歡ぶ東京の市民や、大文字山の火を珍らし
- 2 がる京都の住民に見せたなら、どんなにびつ
- 3 くりすることとせう。私が其の時、ちよいと
- 4 見渡したところだけでも、未だに忘れられな
- 5 い程の放膽な模様や巧緻な線状が、数限りな
- 6 くあるのです。たとへて云へば、其れは誰か、
- 7 人間以上の神通力を具備して居る悪魔があ
- 8 つて、空の帳^{とばり}に勝手氣俣な落書きを試みたと
- 9 も、形容することが出来るでせう。或は又、
- 10 世界の最後の審判の日、Doom's Day の近づい」 33
- 1 た知らせに、太陽が笑ひ月が泣き彗星が狂ひ
- 2 出して、種々雑多な変化^{へんげ}星^{ぼし}が、縦横無盡に天
- 3 際を搖曳するのにも似て居るでせう。
- 4 私たちの立つて居る廣場は、正確な半円形
- 5 を形作つて、その円周の弧の上から、七条の

- 6 道路が扇の骨の如く八方へ展いてゐました。
- 7 七条のうちで最も廣い、最も立派なのは、まん中の大通りでした。〈ツゞク〉
- 9 何十軒何百軒あるか分らない公園の見せ物
- 10 の中で、取り分け人氣を呼んでゐる小屋は大」34
- 1 概其處にあるらしく、或は嚴^{いかめ}しい、或は危^{あぶな}つ
- 2 かしい、或は頓興な、或は均整な、ありとあらゆる様式の建築物が、城砦のやうに軒を並べ、参差として折り重なつて居るのです。其處には日本の金閣寺風の伽藍もあれば、サラセニツクの高閣もあり、ピサの斜塔を更に傾けた突飛な櫓があるかと思へば、杯^{さかづき}形に上へ行く程脹らんでゐる化物じみた殿堂もあり、家全体を人面に模した建物や、紙屑のやうに歪んだ屋根や、蛸の足のやうに曲つた柱や、」35
- 10 波打つもの、渦巻くもの、弯屈^{まがまが}【曲(37)】するもの、反^そ
- 2 り返るもの、千差万別の姿態を弄して、或は
- 3 地に伏し、或は天を摩して居ます。

- 4 「あなた……」
- 5 さうして其の時、私の愛らしい戀人は、斯
- 6 う云ひかけて軽く私の袂を引きました。
- 7 「あなたは何が珍らしくて、そんなに見惚れ
- 8 て居らつしやるの？ 其の公園へは度び度び
- 9 お出でになつたのでせう。」
- 10 「私は此處へ何度も来て居る。」〈別行〉さう云はなけ」 36
- 1 れば耻辱を受けるやうに感じて、私は惶てゝ
- 2 頷きました。「……だがしかし、幾度来ても
- 3 私は見惚れずに居られないのだ。其れ程私は
- 4 其の公園が好きなのだ。」
- 5 「まあ」と云つて、彼の女はあどけなくほゝ笑
- 6 みながら、「あなた（38）」魔術師の小屋は彼處にあるのです。
- 7 【のよ。（38）】さあ早く行きませう。」
- 8 と、左手^{ゆんで}を挙げて、其の「大」通りの果てを指し
- 9 ました。〈別行〉廣場から大通り^天へ這入る口には、
- 10 鎌倉の大佛程もある、眞赤な鬼の首がわれ」 37
- 1 われの方を睨んで居ました。鬼の眼にはエメ

- 2 ラルド色の、濃緑色の電燈が爛々と燃えて、
- 3 鋸のやうな齒を露はして笑つて居ます。ちや
- 4 うど其の齒の生へて居る上顎と下顎との間が、
- 5 一箇のアーチになつて居て、多勢の人は其
- 6 處をくゞつて行くのです。それでも、
- 7 公園全体が溶礪爐の如く明るいの、其の大
- 8 通りの明るさは又一段と際立つて、一道の火
- 9 氣が鬼の口から烈々と噴き出て居ます。私は
- 10 戀人に促されて其の火の中へ飛び込んだ時、
- 1 さながら体が焦げるやうな心地を覚え【がし (39)】ました。
- 2 両側に櫛比して居る見世物小屋は、近づい
- 3 て行くと更に仰山な、更に殺風景な、奇想的
- 4 なものでした。極めて荒唐無稽な場面を、け
- 5 ばけばしい絵の具で、忌憚なく描いてある活
- 6 動写真の看板や、建物毎に独特な、何とも云
- 7 へない不愉快な色で、強烈に塗りこくられた
- 8 ペンキの匂や、客寄せに使ふ旗、幟、人形、
- 9 楽隊、仮装行列の混乱と放埒や、其れ等を一

- 10 一詳細に記述したら、恐らく読者は竦然とし」 39
- 1 眼を掩ふかも知れません。私があれば見た時の感じを、一言にして云へば、其處には妙齡
- 2 の女の顔が、腫物でまものの為に濃みたゞれて居る
- 3 やうな、美しさと醜さとの奇抜な融合がある
- 4 のです。眞直ぐなもの、眞ん円なもの、平たひらなもの、——凡べて正しい形を有する物体ぶつたいの世界を、凹面鏡や凸面鏡に映して見るやうな、
- 5 不規則と滑稽と胸悪さとが織り交つて居るの
- 6 です。正直をいふと、私は其處を歩いて居る
- 7 うちに、底知れぬ恐怖と不安とを覚えて、幾
- 8 度か踵かかとを回さうとしたくらゐでした。〔別行〕若しも
- 9 彼の女が一緒でなかつたら、私はほんたうに
- 10 途中で逃げたかも知りません。私の心が憶するに従ひ、彼の女はますます軽快に、子供のやうな無邪気な足どりで、勇ましく進んで行くのでした。私が物に脅かされた怯懦な眼つきで、訴へるやうに彼の女の様子を窺ふと、

- 8 彼の女はいつも面白さうな、罪のない笑顔を
9 見せてにこにこして居るのです。
10 「お前のやうな正直な、柔和な乙女が、此の」 41
1 恐ろしい街の景色を、どうして平氣で見居
2 られるのだらう。」
3 私は屢々、彼の女に尋ねようとして躊躇し
4 ました。けれども私が實際斯う云ふ質問を發
5 したら、彼の女は何と答へたでせう。「わたし
6 が平氣で居られるのは、あなたの感化だ。」と
7 云ふでせうか。「わたしにはあなたと云ふ戀人
8 がある為めなのです。戀の闇地へ這入つた者
9 には、恐ろしさもなく耻かしさもない。」と云
10 ふでせうか。——さうです。彼の女はきつと」 42
1 此れ等の言葉を答へるに違ひないでせう。彼
2 の女は其れ程熱心に私を信じ、其れ程純粹に
3 私を愛して居【くれ(40)】るのです。羊のやうに大人し
4 い、雪のやうに淨い彼の女が、其の公園を喜
5 ぶのは、たしかに私を戀ひして居る証據なの

- 6 　です。私の趣味を自分の趣味とし、私の嗜好
7 　を自分の嗜好にしようと努めた結果なのです
8 　。世間の人は彼の女の事を、私のために墮落
9 　をしたと云ふかも知れません。しかし彼の女
10 　の趣味や嗜好が如何程悪魔に近づいたにせよ、」
1 　彼の女の心、彼の女の心臓はいまだに人間
2 　らしい温情と品威とを、失はずに居たので
3 　した。【です。(41)】
- 4 　さう考へると、私は彼の女に感謝せずには
5 　居られませんでした。私のやうな、世の中に
6 　何の望みもなく、唯美しい夢を抱いて國々を
7 　漂泊しながら、慵^{もつ}く侘^わびしく生きて居る人間
8 　が、貴い乙女の魂を征服して居る事を思ふと、
9 　私は非常に勿体ない心地がしました。
- 10 「私はとてもお前のやうな優しい女子^{をなご}の恋人」
1 　になる資格はないのだ。お前は私と一緒にな
2 　つて、其の公園へ遊びに来るには、餘りに気
3 　高い、餘りに正しい人間だ。私はお前に忠告
- 44
- 43

- 4 する。お前の為めには、二人の縁を切つた【てしまふ(42)】
- 5 方が、どんなに幸福だか分らない。私は
- 6 お前が、こんな所へ平気で足を踏み入れる程
- 7 、大膽な女になつたかと思ふと、【へば、(43)】自分の罪が
- 8 空恐ろしく感ぜられる。」
- 9 私は不意に斯う云つて、彼の女の両手を捕
- 10 へたまゝ、往来に立ち竦んでしまひました。」 45
- 1 しかし彼の女はやつぱり平気で、にこやかに
- 2 笑つて居るばかり【の(44)】です。自分の一身が、いかに忌
- 3 まはしい滅亡の淵に臨んで居るかを、心付か
- 4 ない小児のやうに、朗かな瞳を開き、爽やか
- 5 な眉を示して居るのです。私が同じ意味の言
- 6 葉を再三再四(45)繰返すと、
- 7 「私は覚悟して居ます。今更あなたに伺はな
- 8 いでも、私にはよく分つて居ます。あなたと
- 9 一緒に、斯うして其の町を歩いて居る今の私
- 10 が、自分にはどんなに【一番(46)】楽しく、どんなに【一番(46)】幸福に感ぜら
- 1 でせう。【のです。(47)】あなたが私を可哀さうだと思つたら、
- 46

- 2 どうぞ私を永劫に捨てないで下さい。私が
- 3 あなたを疑はないやうに、あなたも私を疑は
- 4 ないで居て下さい。」
- 5 彼の女は相變らず機嫌のよい、小鳥のやう
- 6 な麗らかな聲で、たゞ譯もなく斯う云ひ捨てゝ
- 7 しまひました。【ふのです。(48)】さうして、ふたゞび私を促し
- 8 て、例の魔術師の小屋の前までやつて来た時、
- 9 「さあ(49)あなた、其れから私達は試しに行くのです。
- 10 二人の恋と、魔術使の術と、孰方どっちが強いか」47
- 1 試してやりませう。私はちつとも恐こはくはあり
- 2 ません。私は自分を堅く堅く信じて居ますか
- 3 ら。」〈別行〉と、私を激勵するやうに幾度となく念を
- 4 押しました。それ程迄に突き詰めた、彼の女
- 5 の真心のうるはしさを見せられては、たとへ
- 6 私がいかに卑劣な、性根の腐つた人間でも、
- 7 どうして感奮せず居られませう。
- 8 「先まづの言葉は私が悪かつた。お前のやうな清
- 9 い女が、私のやうな汚れた男と結び着く事に

10 なったのは、大方運命と云ふものだらう。二 48

1 人の体と魂とは、眼に見えぬ宿縁の鎖で、生

2 れぬ前から一緒に縛られて居たのだらう。

3 お前は清い女のまゝで、私は汚れた男のまゝ

4 で、二人は永へに愛し合ふべき因果に支配さ

5 れて居るのだ。——魔術師は愚か、どんなに不

6 思議な、どんなに凄じい地獄へでも、私はお

7 前を連れて行かう。お前でさへ恐くないと云

8 ふのに、何で私に恐いものがあるだらう。」

9 私は斯う云つて、彼の女の前に跪いて、神

10 々しい白衣びやくえの裾【白羽びやく二重じゆうの羅衣らぎぬの縁へり】(50)に、長い(50)接吻を與へま」
49

1 した。

2 魔術師の小屋のある所は、彼の女が云つた

3 通り、【今歩いて来た(51)】繁華な街区の果てにある【を少し放れた、(51)】

4 物淋しい一廓だうでした。湧き返るやうな鬧なだう

5 囂じやうの巷ぢやうから、急にうす暗い、陰気な地域へ出

6 て来た私の神経は、鎮静するといふよりも、

7 却つて一層の気味悪さに襲はれて、不測の災

- 8 に待ち受けられて居るやうな、疑心の昂^{たか}まる
- 9 のを覚えました。私は今迄、其の公園には何
- 10 等の自然的風致、——木とか森とか水とか云」 50
- 1 ふ物が、全く缺けて居る事を訝しんで居まし
- 2 たが、其の一廓へ来た時に、初めて其れが幾
- 3 分應用されて居るのを認めました。しかし勿
- 4 論、其處に使はれて居る自然的要素は、決して
- 5 自然の風致を再現する為めに塩梅せられた
- 6 ものではなく、寧ろ飽くまでも人工を助け、
- 7 其の拗^{ひね}れた技巧の効果を補ふ為めの材料として、
- 8 取り入れられて居るのでした。(ツヅク)
- 9 かう云つたらば或る讀者は、「アルンハイム
- 10 の領地」とか、「ランダアの小屋」とか云ふポオ」 51
- 1 の小説に描かれた園藝術を想像するかも知れ
- 2 ませんが、私の云ふ人工的の山水は、あれよ
- 3 りももつと小細工を弄した、もつと自然に遠
- 4 ざかつた景色のやうに思はれました。つまり、
- 5 木だの草だの、水だの【「と」云ふもの(52)】を、ア—

- 6 ちや看板や電燈など、全■^(と)く同じに、或る
- 7 建物を作り上げる道具の一種として、取り扱
- 8 ったて居るのです。其處にあるものは、縮小さ
- 9 れた自然、若しくは訂正された自然でなくて、
- 10 山水の形を取った建築物だといふ方が、適當」 52
- 1 だかも知れません。森や林が、植物らしい澁
- 2 刺とした生気を缺き、器用な模造品のやうな、
- 3 詭へ向きの線状【と色と(53)】をたつぷりと湛へて、
- 4 庭といふよりも芝居の道具立てに近い感じを
- 5 起させます。絵の具の代りに木の葉を使い、
- 6 波幕の代りに水を使い、張子はりこの代りに丘を使
- 7 ったと云ふだけの事なのです。
- 8 その山水を、一個の舞台装置として評價す【観(54)】れ
- 9 ば、たしかに凄惨な、特有【独特(55)】な場面になつて居
- 10 て、到底自然の風致などの、企及し難い或る」 53
- 1 物を擱んで居ました。其處では一本の樹木の
- 2 枝、一塊の石の姿まで、幽鬱な暗示を含み、
- 3 深遠な觀念を表はすやうに配置され【て(56)】、吾人

- 4 は其れが樹木であり、石である事を忘れる迄
- 5 に、慄然たる鬼気を感じるのです。読者は多
- 6 分、ベツクリンの描いた、「死の嶋」といふ絵の
- 7 ある事を御存知でせう。さうして私が、現在
- 8 説明しようとして居る場面は、多少あの繪に
- 9 似通つた効果を、更に冷く、更に晦く、
- 10 更に寂寞たる物象に依つて現はして居るので」54
- 1 した。へツゞク
- 2 先づ第一に、私の神経を極端に脅かしたも
- 3 のは、あの一廓を屏風の如く圍繞して、黒く、
- 4 堆く、轟々と攢立してゐるポプラアの林で
- 5 す。私が其れを林であると気がつく迄には、
- 6 餘程の時間を要しました。なぜと云ふのに、
- 7 遠くから望むと、「其れは殆ど林と見へないくらゐ、不可解な恰好をしてゐたからです。」たとへて見れば、ち
- やう
- 8 ど監獄署の塀のやうな、頭もなく足もなく、
- 9 たゞ眞黒な平な壁が、
- 10 井戸側の如く円く續」55

※「」内は欄外に書き込まれ、当該箇所に入りの指示あり

- 1 いて、天に聳えて居るのです。而もだんだん
- 2 精細に熟視すると、其の蜿蜒たる壘壁るいへきの
- 3 輪は、二匹の偉大な蝙蝠かうもりが、右と左に立ち別
- 4 れ「つゝ」両方から暗澹あんたんたる翼つばさを
- 5 ■■つと擴げて、手を握り合つた形状
- 6 を備へて居るのでした。注意すれば注意する
- 7 程、蝙蝠かうもりの眼や耳や、手や足や、翼と翼との
- 8 間隙などが、明瞭な輪廓を以て、障子へ映る影
- 9 法師のやうに、ありありと、天地の間に塞が
- 10 つて居るのです。それ故、「其の巧妙な Silhouette が何で造られたものであらうか私が判断に」苦しんだのも無理」56

※「」内は欄外に書き込まれ、当該箇所に入りの指示あり

- 1 がありません。一番最初は森に見え、其の次
- 2 ぎには壁に見え、其の次ぎに蝙蝠かうもりに見え出し
- 3 た【其の礎々たる(57)】モンスターが、実はやつぱり
- 4 枝葉の繁つた白揚樹みつりんの密林を、非常に大規模
- 5 な、非常に精妙な技術に依つて、怪物の姿に
- 6 模したものだとなつた時、私は一段
- 7 の驚異と讚嘆とを禁じ得ませんでした。

- 8 「あなたは誰が其の森を設計したか御存知ないでせう。其れはあの魔術が作ったのです。
- 9 つい近頃、自分が勝手に植木屋を指図して、」 57
- 10 大木をどンドン運ばせて、僅かの間に植えさせてしまつたのです。へッゞク
- 2 仕事に與あづかつた多勢の人夫たちは、誰一人も此の森がどんな形に出来上るか、氣が付いた者は居ませんでした。「彼等はたゞ魔術師の命ずるまゝに、出来上つた時、
- 5 魔術師は愉快さうに笑つて、「森よ、森よ、お前は蝙蝠かろうりの姿になつて、人間共を威嚇してやれ。」と叫びながら、魔法杖まほうづえを振り上げて大地を三度みび叩たたきました。すると忽ち、其處に居合はせた人夫等は、自分たちが今迄夢中で」 58
- 10 拵こしらへてゐた白揚樹の森が、偶然にも怪鳥【物（58）】の影法師に似て居る事を発見したのです。其れ以來、魔術師の評判は、此の森の噂うはさと共に、
- 3 普く街中へ廣まりました。へッゞク

※「」内は欄外に書き込まれ、当該箇所に入りの指示あり

- 5 或る人の説では、實際森が怪鳥の形を持つて居るのではなく、見る人の方が、さう云ふ幻覚を起すのだと云ひます。しかし兎に角、
- 6 魔術師の小屋へ行かうとして、此處を通りか
- 7 かつた者は、必ず常に影法師に脅されて、膽
- 8 を冷やさずには居りません。森が魔法にかけ
- 9 られて居るのか、見る人の方がかけられて居る
- 10 のか、其の秘密を知つて居るのは、たゞ当人の魔術師ばかりです。」
- 1 かういふ彼の女の物語を聞きながら、私は
- 2 尚も瞳を凝らして、附近一帯の風物を細やかに點検しました。
- 3 魔法の森——これは町の人が附けた名前なのです。——は、單に形態が妖怪じみて居るばかりでなく、空の中途に濃こい高たかい帳とばりを繞めぐらして、その圈内けんないに包まれた区域を、公園全体の「
- 4 花やかな色彩から都合よく遮蔽し、闇やみと呪のろひ
- 5 とに充たされた荒涼たる情景を作るのに、極

3 めて主要な役目を勤めて居るのでした。(ツヅク)

4 森に取り巻か【返さ(59)】れた場所の廣さは、何でも不^{しの}

5 忍池^{ばすのいけ}ぐらゐはあつたでせう。さうして其の大

6 部分には、眞暗な、腐つた水のどんよりと

7 澱^{よど}んだ、じめじめとした沼が、水のやうに冷^{ひや}かな

8 底光り【底の光り(60)】を見せて(60)、一面に行^ゆき^{わた}つてゐる様子でした。

※●は、さんずい+弥

9 魔法の森で、自分の視覚を疑つた私は、

10 その沼に対しても、あんまり水面が静かであ」61

1 るため、ほんたうの水が湛^たへてあるのか、そ

2 れともガラスが張つてあるのか、暫く断案を下すのに(61)

3 躊躇^{ちゆうじゆ}しました。実際、ガラス張りだと信ずる

4 事が可能な程、その水は磴^{がいがい}々として動かず流

5 れず、一つ所に凝り固まつて、試^{ため}しに石を投

6 げ込んでも、憂^{かつ}々と鳴つて●ね返りさうに思

※●は、てへん+発

7 はれました。此の肅然とした「死」のやうに寂

8 しく厳^いめしい沼の中頃に、嶋とも船とも見定

- 9 め難い丘のやうな物が浮かんで居て、^{「The}
 10 Kingdom of Magic」と微妙に記した青い明りが、^{あか}」62
- 1 たった一點、常住の暗夜を照らす星の如く、
 2 頂の尖^{とが}つた所に灯^{とも}されて居ます。「丘のやうな
 3 物」が何であるかは、今少し精しく説明する必
 4 要がありますが、其れは恰も地「獄」の繪にある針
 5 の山に酷似した、突兀^{（獄）}たる巖■石の塊^{かたまり}なの
 6 です。三角形の、矛^{ほこ}のやうに鋭い岩が磊々と
 7 積み重なつて、草もなく木もなく家もなく、
 8 黙然と蟠^{わたかま}つて居るのです。たゞ此れだけで、
 9 「魔術の王國」と云ふ看板はあるものゝ、其の王
 10 國が何處にあるのやらさつぱり分りません。」63
- 1 「あそこです。——あそこが小屋の入り口です
 2 」。
- 3 と云つて、彼の女が指^{ゆびさ}した方を見ると、成
 4 る程看板の眞下の邊^{へん}に、岩と岩との間に挟ま
 5 った、小さいな、窮屈な、鉄の門らしいもの
 6 がありました。さうして私たちの云つて居る

- 7 沼の澹から、一条の細長い危あぶなつかしい仮橋かりばしが、
- 8 其の門の前(62)までかゝつて居るのです。
- 9 「だが彼の門は堅く締まつて居るやうだ。見
- 10 物人の出這入りする風もなければ、人間らし」 64
- 1 い聲と云ふものがまるきり聞えない。あれで
- 2 も魔術をやつて居るのか知ら。」
- 3 私が獨り言のやうに云ふと、彼の女は直ぐに【ちに(63)】
- 4 頷きました。
- 5 「さうです。今が大方、魔術の始まつて居る
- 6 最中でせう。あの魔術師は普通の手品使ひと
- 7 違つて、演技の半ばに囃しを入れたり、拍手はくしゅ
- 8 を求めたりしないさうです。それ程魔術が深
- 9 刻で、敏速だと云ふ話です。見物のお客も一
- 10 様に固唾かたづを呑んで、殆んど総身へ水をかけら」 65
- 1 れたやうな気持ちになつて、時々こつそりと
- 2 溜息を洩らすばかりだと云ひます。あの静か
- 3 さから推量すると、今がきつと演技の最中に
- 4 違ひありません。」

5 斯う云つた彼の女の聲は、抑へ切れない恐
6 怖の為めか、それとも怪しい昂奮の為めか、
7 例になく皺喰れて顫へて居るやうでした。〔別行〕
8 二人は其れ切り黙り込んで、嶋に通ずる仮
9 橋を渡り始めました。

10 〔二行アケ〕 66

1 門を這入つて僅かに五六歩進んだ時、今ま
2 で陰惨な暗黒の世界に馴れて居た私の瞳は、
3 俄かに満場の眩い光線に射竦められて、ぐり
4 ぐりと抉られるやうな痛みを覚えました。〔ツゞク〕

5 あの、礪々たる土塊の外見を持つて居た魔
6 術の王國は、意外にも金壁燦爛たる大劇場の
7 内部を備へて、柱や天井に隙間なく施された
8 荘嚴な裝飾が、焔々とした電燈に映じて眼
9 の醒めるやうに輝いて居るのです。さうして
10 場内のあらゆる坐席は、土間も二階も三階も、

1 ぎつしりと塞がつて、身動きも出来ない大
2

- 3 入いりでした。〈ツゞク〉
- 4 観客のうちには、支那人だの、印度人だの、
- 5 欧羅巴人だの、種々雑多な服装をした凡べ
- 6 ての人種が網羅されて居ましたが、なぜか日
- 7 本人らしい風俗の者は、われ／＼以外に一人も
- 8 見当りませんでした。それから又、特等席の
- 9 ボックスには、其の都の上流社会の、公園な
- 10 どへ容易に足を踏み入れる筈はずのない、紳士や」68
- 1 貴婦人のきらびやかな一團が並んで居ました。〈ツゞク〉
- 2 彼等の婦人の或る者は、由緒ゆゑしよある身の外聞
- 3 を憚る為めか、回々教徒の女人にょじんのやうな覆面
- 4 をして、人影に肩をすぼめて居ましたけれど、
- 5 猶且なほかつ舞台上に注がれた二つの瞳には、秘密を
- 6 裏切る品威と情慾との、鮮やかな色が現れて
- 7 居るのでした。紳士の中には此の國の大政治
- 8 家や、大実業家や、藝術家や宗教家や道楽息
- 9 子や、いろいろの方面で名を知られた男たち
- 10 が交つて居ました。私は彼等の多くの顔を、」69

- 1 嘗て幾度も寫眞で見た事があるやうに感じま
- 2 した。彼等の或る者はナポレオンに似、又或
- 3 る者はビスマルクに似、或る者はダンテのや
- 4 うな、或る者はバイロンのやうな輪廓を備へ
- 5 て居るのでした。其處にはネロもソクラテス
- 6 も居たでせう。ゲエテもドン、フアンも居たで
- 7 せう。私は彼等が、どうしてこんな魔の王國
- 8 に来て居るのか、其の理由を直ちに解釈する
- 9 事が出来ました。聖人でも暴君でも詩人でも
- 10 学者でも、みんなやつぱり「不思議」と云ふも」70
- 1 のに惹き寄せられる心を持つて居るのです。
- 2 彼等は或ひは研究の爲め、經驗の爲め、布教
- 3 の爲めに來たのだと云ふでせう。多分彼等は、
- 4 自分でもさう信じて居るでせう。しかし私
- 5 に「云」はせると、彼等の魂の奥底には、程度こそ
- 6 ■^三違へ、私三が感ずると同じやうな美を感じ、
- 7 私がゆめみ夢ると同じやうな夢をゆめみ夢る素質が潜んで
- 8 居るのです。彼等はたゞ、私のやうに其れを

- 9 意識し、若しくは肯定しないだけの相違なの
- 10 です。——私は何と云ふ事もなく、こんな【斯う云ふ(64)】
1 風に考へました。 71
- 2 私と彼の女とは、支那人の辨髪だの、黒人
- 3 の頭帕タテバシだの、婦人のボンネットだのが、紅蓮
- 4 白蓮の波打つやうに錯綜して居る土間の椅子
- 5 場に分け入つて、辛うじて二つの席に坐を占
- 6 めました。舞台と私たちとの間には、少くと
- 7 も五六行の椅子が列んで居て、其の大部分に
- 8 は、瀟洒たる初夏の装ひを凝らした欧州種
- 9 若い女等が、肉附のいゝ清らかな項うなじを揃へ
- 10 て、白鳥のやうに群むら【集ま(65)】つて居るのでした。私」 72
- 1 の視線は其れ等の幾層にも重り合つた女の肩
- 2 を打ち超えて、其の向うにある舞台の上に注
- 3 がれたのです。
- 4 舞台の背景には、一面に黒幕が垂れ下つて、
- 5 中央の一段高い階段の上に、素晴らしく立
- 6 派な、玉座の如き席が設けてありました。其

7 れが所謂「魔術のキングダム」の王の●る可き

※●は、手へん十處

8 席なのでせう。其處には生きた蛇の冠を頭に

9 戴き、羅馬時代の袍衣トリーガを身に着けて、黄金わうごんの

10 草鞋サンダルを穿いた極めて年若な魔術師が、端然と」 73

1 して腰掛けて居るのです。階段の下の、玉座

2 の右と左には、三人づゝの男女の助手が、奴

3 隸のやうに畏まり、足の裏を観客の方へ曝し

4 て、さも賤げに額づいて居ます。舞台の装置

5 と人物とは、纔かに其れだけの、簡單過ぎた

6 ものでした。

7 私は上着のポケットを捜つて、門を這入る

8 時に渡されたプログラムを開けて見ましたが、

9 其れには大凡そ二三十種の演技の數が記し

10 てあつて、孰どれも其れも悉く前古未曾有な、」 74

1 驚天動地の魔術であるらしく想像されました。

2 最も私の好奇心を煽【呻（66）】つた二三番の例を挙げれ

3 ば、第一にメスメリズムと云ふのがあります。へツゞク

- 4 其れは小書きの説明に依ると、場内の観
- 5 客全体に催眠作用を起させるので、劇場内の
- 6 あらゆる人間が、魔術師の與へる暗示の通り
- 7 に錯覚を感ずるのです。たとへば魔術師が、
- 8 「今は午前の五時だ。」と云へば、人々は爽や
- 9 かな朝あさの日光を見、自分たちの懐中時計
- 10 がいつの間にやら五時を示して居る事に氣が」 75
- 1 付きます。其の外「其處は野原だ。」と云へば
- 2 野原に見え、「海だ。」と云へば海に見え、「雨だ
- 3 。」と云へば体がビシヨビシヨと濡れ始めます。
- 4 次ぎに恐ろしいのは「時間の短縮」と云ふ妖術
- 5 です。魔術師が一箇の植物の種子を取つて土
- 6 中に蒔き、徐ろに咒文を唱へると、十分間に
- 7 其れが芽を吹き莖を生じて花を咲かせ実を結
- 8 ぶのです。而も其の植物の種子は、観(67)客の方で
- 9 勝手な物を何處からでも擇んで来ることを望
- 10 むばかりか、亭々として雲を凌ぐやうな高い」 76
- 1 幹でも、鬱蒼として天を蔽ふやうな繁つた葉

- 2 でも、十分間に必ず發育させると云ふので
- 3 す。其れに似たのもつと無氣味なのは、「不思議な妊娠」と題せられた演技でした。其れ
- 4 も同じく呪文の力で、十分間に一人の婦人を
- 5 妊娠させ●娩させるのださうです。其の魔法

※●は、女へん十分

- 7 に使はれる婦人は、多くの場合「王國」の奴隸の
- 8 女ですが、若しも見物人の内に有志の婦人が
- 9 あつてくれれば、更に有り難いと書いてあります。以上の例を讀んだゞけでも、讀者はい」 77
- 10 かに其の魔術師が、凡庸の手品使ひと類を異
- 1 にして居るか、了解する事が出来るでせう。〈別行〉
- 2 　　しかし非常に残念な事には、私が入場した
- 3 折には、既にプログラムの大部分が演了せられて、纔かに最終の一番を剩して居る所でし
- 4 た。私たちが席へ就いてから間もなく、玉座
- 5 に据わつて居た彼の魔術師は、やをら立ち
- 6 上つて舞台の前面に歩み出で、子供のやうに

- 9 顔を赧らめながら、可愛らしい、羞耻を含んだ低い聲音こはねで、今から取りかゝる魔法の説明」 78
- 10 を試みました。
- 1 「……さて、今晚の大詰おほづめの演技として、
- 2 私は茲に最も興味ある、最も不可解な幻術
- 3 を、諸君に御紹介したいと思ひます。其の幻術は、仮りに『人身變形法』と名づけてありますが、つまり私の咒文の力で、任意の人間の肉体を、即坐に任意の他の物体——鳥にでも蟲にでも獸にでも、若しくは如何なる無生物、たとへば水、酒のやうな液體にでも、諸君のお望みなさる通りに變形させてしまふので」 79
- 10 す。或は又、全身【人間の体全部（68）】でなくとも、首とか足とか、肩とか臀とか、ある一（69）局部だけを限つて、變形させる事も出来ます。……」
- 4 私は、魔術師が諄々として語り續ける滑かな言葉よりも、寧ろ彼の艶冶な眉目と阿娜たる風姿とに心を奪はれ、いつ迄もいつ迄も恍
- 6

7 惚として、眼を睜みはらずには居られませんでし
8 た。〈ツゞク〉

9 彼が超凡の美貌を備へて居る事は、前から
10 聞いて居たのですが、其れにしても私は今、」80

1 話に依つて豫想して居た彼の顔立ちと、實際
2 の輪廓と「を比較して」、美さの程度に格段の相違があるの
3 を認めました。 (を比較して) ■■■就中、一番私の

4 意外に感じたのは、うら若い男子だとのみ思
5 つて居た其の魔術師が、男であるやら女であ
6 るやら全く区別の付かない事です。女に云は
7 せれば、彼は絶世の美男だと云ふでせう。け
8 れども男に云はせたら、或は曠古の美女だと
9 云ふかも知れません。私は彼の骨格、筋肉、
10 動作、音聲の凡べての部分に、男性的の高雅」81
1 と智慧と活潑とが、女性的の柔媚と繊細と
2 陰険との間に、渾然として融合されて居るの
3 を見ました。たとへば彼の房々とした栗色の
4 髪の毛や、ふつくらとした瓜実顔の豊頬や、

- 5 眞紅な小さい唇や、優婉にして而も精悍な
- 6 手足の恰好や、其れ等の一點一劃にも、其の
- 7 微妙なる調和の存在して居る工合は、ちや
- 8 うど十五六歳の、性的特張がまだ充分に發達
- 9 して居ない、少女或は少年の体質によく似て居
- 10 ました。それから彼の外見に関するもう一つ」82
- 1 の不思議は、彼が一体、何處に生れた如何
- 2 な人種であらうかと云ふ問題です。其れは恐
- 3 らく、誰れしも彼の皮膚の色を見た者には當
- 4 然起る可き疑ひで、その男——だか女だかは、
- 5 決して純粹の白人種でも、蒙古人種でも、
- 6 黒人種でもないのです。強ひて比較を求めた
- 7 なら、彼の面相や骨格は、世界中での美人の
- 8 産地と云はれて居るカウコサスの種属に、
- 9 いくらか近い所があるかも知れません。けれ
- 10 ども、もつと適切に形容すると、彼の肉体はあ」83
- 1 らゆる人種の長所と美點ばかりから成り立つ
- 2 た、最も複雑な混血兒であると共に、最も完

- 3 全な人間美の表象であると云ふ事が出来ます。
 - 4 彼は誰れに対しても常にエキゾテイクな魅力
 - 5 を有し、男の前でも女の前でも、擅に性的誘
 - 6 惑を試みて、彼等の心を蕩かしてしまふ資格
 - 7 があるのです。
 - 8 「：ところで私は、豫め皆さんに御相
 - 9 談を(70)して置きますが：」
 - 10 と、魔術師は猶も言葉を續けました。」84
- ここより又谷崎氏自身執筆されたり
- 1 「私は先づ試験的に、此處に控へて居る六人の奴隸を使
 - 2 用して、彼等を一々変形させて御覧に入れま
 - 3 す。しかし私の妖術のいかに神秘な、いかに
 - 4 奇蹟的なものであるかを立證する為め、私は
 - 5 是非共満場の紳士淑女が、自ら奮つて私の魔
 - 6 術にかゝつて頂く事を望みます。【きたいと云ふ事を、前以て
 - 7 お願ひして置くのです。(71)】既に私が此の公園で
 - 8 興行を開始してから、今夜で二た月餘りにな
 - 9 りますが、其の間あひだ毎夜のやうに中々観客中

- 10 の有志の方々が、**而も**常に多勢（72）、私のために進んで舞台**中**へ登」85
- 1 場され、**魔**甘んじて魔術の犠牲となつて下さ
- 2 いました。犠牲——さうです。其れはたし
- 3 かに犠牲です。貴き人間の姿を持ちながら、
- 4 私の法力ほふりきに弄ばれ、**て**、**犬**となり豚となり、石こ
- 5 ろとなり糞土ふんどとなつて、**耻**を衆人環視のうち
- 6 に耻を曝す勇氣がなければ、此の舞台へは来
- 7 られない筈です。にも拘らず、私は毎夜観客
- 8 席に、**頗る****中****中**特奇特な犠牲者を幾人でも發
- 9 見する事が出来ました。中には身分の卑しか
- 10 らぬ**【**ざる（73）**】**貴公子や貴婦人なども、**交**つて居るの」86
- 1 ず。密かに犠牲者の**仲間**あひだへ加はつて居られ
- 2 ると云ふ噂を聞きました。それ故私は、今夜
- 3 も亦例に**中**依つて、澤山の有志家が**中**續々續々と輩
- 4 出せられる事を信じ、且誇りとして居る次第
- 5 なのです。」
- 6 斯う云つた時**中**、青白い（74）魔術師の顔には顔には
- 7 さも得意気な、**中**凄惨な**【**い（75）**】**微笑が浮かびました。

- 8 而も【さうして(76)】多くの見物人は、彼^中〔の〕不敵な〔辯舌〕を聴き、
- 9 中傲慢な態度に接すれば接す^(の)中^(辯舌)る程、
- 10 だんく【ますく(77)】彼ゆに魂を惹き付けられ、征服され」87
- 1 て行くやうに感ず〔な心地がす〕るのです。
- 2 やがて魔^(な心地がす)術師は、その時まで玉
- 3 座の前に「跪いて、」彫刻の群像の如く蹲踞^{うづくま}や〔平伏し〕て居た奴隷
- 4 ^(跪いて)中^(平伏し)の中から、十番^中も若小
- 5 十番傷々しい一人の〔可憐な〕美^{たを}女^{やめ}を 塵^{さしまね}いてくと、彼
- 6 の女可憐なは夢^(可憐な)遊病者の如く【やうに(78)】よろ
- 7 よろとして(78) 歩み出立ち止りつと中魔術師の前に歩
- 8 み出で、再び其處に畏まりながら、【行者の如く畏まつて、(79)】絲
- 9 中^{たる}の弛んだ操^{あやつ}り人形のやうに、ぐたり
- 10 と中頭^{こうべ}を項^{うなだ}垂れました。」88
- 1 「お前は私の奴^中隷のうちでも、一番私の氣に
- 2 入った、〔二番^中〕可愛らしい女だ。お前は嘸^なかし、私
- 3 の家来^(二番)中^(二番)になつた事の奴隷になつた事を
- 4 中^中を幸福に中^中もう五六年、お前が辛抱して
- 5 さへ居れば、お中^中私はきつとお前を立派な

- 6 魔術師にさせて居るや。人間は勿論、神で
- 7 も悪魔でも及ば「ば」ないやうな、世界一の魔法使
- 8 ひにさせてやる。お前は嘸かし、私の家来【奴隸(80)】
- 9 になつた事を幸福に感じて居るだらう。人間
- 10 界の女王になるより、も魔の王国の奴隸にな」89
- 1 方が、遥かに幸福な事を悟つただらう。」
- 2 魔術師は、床に垂れた彼の女の長い髪の毛
- 3 を、自分の足に踏み敷いて、儼然と身を反ら
- 4 したまゝ、きながら、儼然と儼然と身反り身
- 5 になつて直立したまゝ、こんな句文句を嚴か
- 6 に云ひ渡して、【ました。さうした後、(81)】
- 7 「さあ、此れからいつもの変形術を行ふのだ
- 8 が、お前は今夜は何になりたかい？ 中は
- 9 お前が知つて居る通り、非常に慈悲深い王様
- 10 だ。何でもお前の望みのまゝにさせてやる。」90
- 1 るから、好きな物を云ふがいと。」
- 2 と、恰も歡ばし【有り難(82)】い恩寵を授けるやうな句調
- 3 で云ひました。

- 4 其の時、**中**まるで石膏の如く**【やうに(83)】**硬張こはばつて居
- 5 た女人にょにんの全身は、忽ち電流を感じたやうにお
- 6 るぶる波もくもくと波打つて、顫へ始**中**めたか
- 7 と思ふと、氷の融けた河水かはみづの如く彼の女の唇
- 8 も動き始めて、
- 9 「あゝ王様、有り難うございます。私は今夜
- 10 夜美しい孔雀になつて、王様の玉座の**柱に背**」91
- 1 中なかにの上を飛び廻りの上に輪**中**を描きつゝ、
- 2 飛び廻りたうございます。」
- 3 と、婆羅門**中**の行者が祈祷するやうに、両手に
- 4 を高く天に掲げて**中**述合掌じゆごうしするのです。
- 5 **【その聲を聞くと、(84)】**〈別行〉魔術師は機嫌よく打ち**(85)**頷いて、
- 6 直ちに「**口の内**で」呪文を唱へ出しました。十分間と
- 7 中**中**の**中**云ふ話でしたが、彼の女の五**(86)**体が
- 8 **中**見て居る見る間に**中**全く**(86)**孔雀の羽毛を生じ
- 9 に蔽はれてしまつた**中**のふ迄には、五分**【間(87)】**もか
- 10 らなかつたでせう。**中**さうして残りの五分」92
- 1 間に、**中**肩から上の人間間の部分が、次第に孔

- 10 施（矢継ぎ早やに）されて行（矢継ぎ早やに）くのです。【甘受しました。(90)】94
- 1 三人の男の奴隸のうち、【内で、(91)】一人は豹の皮となつて、王様の玉座の椅子に敷かれないと云ひました。
- 2 二人は二本の純銀の燭台となつて、階段の左右を照らしたと云ひました。最後に
- 3 二人の女（をんな）奴隸は、（みがる）半身（みがる）軽（みがる）な十二匹の蝶（をんな）十二匹の二匹の優しい胡蝶々と化して【なつて(92)】、（身軽な）身も軽々と王様のお姿に付き纏ひたいと云ふので【ひま(93)】した。さうして其【此(94)】れ等の五人の願ひは、即座に聴き届けられたのです。
- 9 此の、破天荒な妙技を□の數々を眼前に見」95
- 10 眺めた満場の観客は、水を打ったやうに鳴りを静めて□震（おどろ）の餘り鳴りを静めて、我れと
- 1 我が「自分で自分の」視覚の作用を疑ひながら、茫然自失する（自分で自分の）ばかりでした。□□殊（おどろ）に第一の男の奴隸が、魔術師の杖に叩かれて煎餅のやうに導くなり、やがて美しい豹の皮に変らうとする「一刹那の」瞬間の呻（うな）き苦しい呻吟めき聲（うな）に魔（うな）されて
- 7 6 5 4 3 2 1

- 8 (二利那の) き聲を聞かされた瞬間に、私は自
- 9 中分の前に腰かけた一人の女が、中慄然とし
- 10 て面を蔽ひつゝ連れの男に抱き着いたのを認めました。 96
- 1
- 2 「どうですか皆さん、……誰方か犠牲者【舞台へお上り(95)】
- 3 になる方はありませんか。」
- 4 と、魔術師は前よりも一層勝ち誇った態度
- 5 を示して、身身辺に飛び交う二匹の蝶を追ひ
- 6 やりながら、王座舞台舞台の上を往つたり来
- 7 たりして居るのです。
- 8 「……皆さんは私魔の王國に捕虜となる事
- 9 を、そんなに気味悪く思ふのですか。人間の
- 10 威嚴だのや形態と云ふものに【に対して(96)】、それ程【そんなに(97)】執着する」 97
- 1 値打ちがあると思ふのですか。「あなた方は、私のために」此処に居る蝶
- ※「」内は欄外に書き込まれ、当該箇所挿入の指示あり
- 2 々や孔雀や豹の皮や燭台がは、あなたたちよりど
- 3 んなに幸福であるあなた方変形【化(98)】させられた
- 4 奴隷たちの境遇を、浅ましいもの哀れなもの

- 5 と考へるかも知れません。しかし彼等の外見
- 6 は、たとへ蝶々であり孔雀であり、豹の皮で
- 7 あり燭台であつても、彼等は(99)未だに人間の□情緒と
- 8 感覚とを失はずに居るのです。彼さうして彼
- 9 等の胸の中には、あなた方の夢にも知らない、
- 10 無限の【と(100)】悦樂と歡喜【満足(101)】とが溢れ漲つて居るのです。」98
- 1 彼等の心境が如何に幸福を感じて居るかは、【な、如何に満足なも
- 2 のであるかは、(102)】一遍私の魔法を試せば□直ぐ
- 3 は分るのです。したお方には、多分大概お分
- 4 りであらうと思ひます。……」
- 5 魔術師の言葉がまだ終わらないうちにはが斯う
- 6 云つて場内の場内の四方を見廻【渡(103)】すと、人々は彼の瞳
- 7 に睨まれて催眠術にかけられる事を恐れたの
- 8 か、皆一度に肩を縮めて膝に突伏してしまふ
- 9 ひました。すると忽ち、さやさやと鳴る衣擦
- 10 れの音に連れて、土間の一隅から舞台の方へ」99
- 1 歩いて行く優し微かな女の靴音が、の響きが、
- 2 深い沈黙の底【空気(104)】を破つて聞えたのです。【ました。(105)】

- 3 「……魔術師よ、お前[□]は私を定めて覚え
- 4 て居るだらう。私は初め[□]お前の魔術よりも、お
- 5 前の美貌に迷はされて、昨日も「今日も」^{おじ、ひ}十昨日も先十^{きん、おと}
- 6 昨日も見物に来たのだ。ました。■^(今日も)■お前が
- 7 私を犠牲「者」の中へ加へてくれれば、[□]それで私
- 8 は自分の■戀がかな[□]つたもの^だと思ひませう。
- 9 だとあきらめます。どうぞ私を、お前の足に
- 10 穿^はいて穿^はい【絡^{から}まつ (106)】て居る金の草鞋^{わらじ}にさせて下さい。」「
- 1 斯う云ふ聲に誘^{さそ}はれて、【驚かされて、 (107)】おづおづと顔を
- 2 擡げた私は、先刻特等席^{せんく}に居た覆面の婦人が、
- 3 殉職者の如くひれ伏して、魔術師の前に倒れ
- 4 て居るのを見出^{みいだ}しました。
- 5 〈二行アケ〉
- 6
- 7 魔術師の魅力に惑は溺れて、惑はされて、舞
- 8 台へふらふらと進み出た男女は、覆人の面の婦人の後
- 9 にも十数人ありました。さうして、ちやうど
- 10 二十人目[□]の犠牲者となる可く、夢中で席を」 101

- 1 離【放（108）】れたのは斯く云ふ私自身でした。
- 2 あの時、私の戀人は、私の袖をし□□つかり
- 3 と捕へて、涙をさめざめと流して云ひました。
- 4 「あゝ、あなたはとうたう魔術師に負けてし
- 5 まったのです。【ひました。（109）】私のあなたを戀ひする心は、あ
- 6 の魔術師の美貌を見ても迷は【変ら（110）】ないのに、あな
- 7 たは彼の□□人に誘惑されて、私を捨てて忘れ
- 8 てしまったのです。私を□捨てゝ、あの魔術
- 9 師に仕へようとなさるのです。あなたは何と
- 10 云ふ意気地のない、薄情な人間でせう。」 102
- 1 「私はお前の云ふ通り、意気地のない人間だ。
- 2 あの魔術師の美貌に溺れて、お前を忘れてし
- 3 まったのだ。成る程（111）私は負けたに違ひない。□しか
- 4 し私には、負けるか勝つかと云ふ事よりもや
- 5 と重はそんな重大な問題ではない。―よりもつ
- 6 と大切な問題【目的標（112）】があるのだ。」
- 7 かう云ふ間も、私の魂は磁石に吸は□□れる鉄
- 8 片のやうに、魔術師の方へ引き寄せられました。

9 て居るのでした。

10 「私の望みは

」
103

1 「魔術師よ、私は半羊神になりたいのだ。半

2 羊神になつて、魔術師の玉座の前に躍り狂つて

3 居たいのだ。どうぞ私の望みをかなへて、お

4 前の奴隷に使つてくれ。」

5 私は舞台上に駆け上つて、譎言のやう口走
6 りました。

7 「よろしい、よろしい、お前の望みは如何に

8 もお前に適当して居る。お前は初めから、

9 人間などに生れる必要はなかつたものだ。」

10 魔術師が【は(113)】からからと笑つて、魔法杖で私の」
104

1 背中を一と打ち打つと、【ピシリと打ちました。すると、(114)】見るく(115)私の両

2 脚には中中鬚々たる羊の毛が生へ、て、頭には

3 二本の角中中が現れ【出(116)】たのです。同時に私達の胸

4 の中には、人間らしい良心良心の苦悶が悉く消えて、

5 【失せて、(117)】太陽の如く晴れやかな、海の如く廣

6 大な愉悦の情が、滾々として湧き出でました。(別行)

- 7 暫くの間、私は有頂天になって、嬉し^{まぎ}中紛
- 8 れに舞台の上を浮かれ廻つて居ましたが、聞
- 9 も「程」なく私の^①中歡びは、私の以前の戀人に依つ
- 10 ■^②て妨害されました。」¹⁰⁵
- 1 私の跡を追ひかけながら【て(118)】、惶^{あは}て、【直ぐに(119)】舞台へ上つて
- 2 来た彼女の女は、魔^③中術師に向つてこんな事を
- 3 云つたのです。
- 4 「私はあなたの美貌や魔法に迷はされて、此
- 5 處へ来たものではありません。私は私の戀人^④中
- 6 戀人を取り戻しに来たのです。彼^あ處の^⑤中中
- 7 彼の忌まはしい半^⑥半羊^{フアウ}「神」の姿になつた男を、
- 8 どうぞ直ちに人間にし^⑦■^⑧て返して下さい。そ
- 9 れとも若し、彼^あの人を返す事が出来ない
- 10 返す譯に行かないと云ふなら、いつそ私を彼^あの人」¹⁰⁶
- 1 と同じ姿にさせて下さい。たとへ彼^あの人が^⑨中
- 2 私を捨て、^⑩中中私^⑪は永^⑫中劫に彼^あの人を
- 3 捨てる事が出来ません。【ないのです。(120)】私は何處までも彼^あの人の跡
- 4 飽く迄、彼の人の行く所へ附いて^⑬中行くのです。

5 彼あの人が半羊神フアウンになつたら、【のなら、(121)】私も半羊神フアウン
 6 になりませう。私は飽く迄、彼あの人の行く所
 7 へ附いて行きませう。」
 8 「よろしい、そんならお前も半羊神フアウンにしてや
 9 る。」
 10 此の魔術師の一言と共に、彼の女は忽ち、」107
 1 醜みにくい呪のろほしい半獣の体からだに化けたのです。【てしまひました。(122)】
 2 さうして、いきなり私の前へ馳せ寄つて、
 3 私を目がけて驀然ぼくぜんと走り寄つたかと思ふと、
 4 小ともいきなり自分の頭あたまの角つのを、私の角つのに執と
 5 念深く口くちしつかりと絡からませみ着かせ、二つの首は(123)飛ん
 6 でも跳ねても離れなくなつて【いやうにして(123)】しまひまし
 7 た。

大正五、十二月作 「108

〈資料3-2〉「原稿」書き換え箇所一覧表

【凡例】

- 一、谷崎による書き換えと見なすことのできる箇所をすべて抽出した。その上で、原稿に施された加筆が初出に反映されていることを示すために「元の語句」「加筆後」「初出『新小説』」の対応する箇所を比較できる形で列挙した。
- 一、引用に際して字体は通行のものに改め、ルビは適宜省略した。
- 一、表の一段目の数字は書き換え箇所の通し番号を表し、二段目の数字は原稿用紙の枚数を表す。
- 一、二重線は、原稿の書き手が交代したことを表し、①谷崎潤一郎②田中純③細田源吉④谷崎潤一郎の順で交代している。
- 一、八十五枚目以降は谷崎自身が原稿用紙上で推敲を重ねながら書き進めている。他の箇所との整合性を図るため、書き換え箇所のみを抽出することとした。文の途中で書き換えられていたり、変更後の文が次行の文中に挿入されていたりといった、執筆中に変更したとおぼしき箇所は書き換えと見なさず、一度書き上げられた文章に施された変更のみを数えた。

| 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 番号 |
|-------|------|---|----|---------|----------------------|----------|--------|-----|-------|-------|----|-----|----------|-----|-----|---------|
| | 13 | 12 | 11 | | | | | 10 | 7 | 6 | 5 | 4 | | 3 | 1 | 枚数 |
| 手を捕へ | さうして | 『The murders in the Rue Morgue』の中に描かれた猛獣の動作が、生き生きとした絵画となつて事実そのまゝに演ぜられる光景を、ちよつとでも考へて御覧なさい。或は | 媚態 | 犯罪の | 一層凶暴な悪漢や、一層嬋麗な毒婦たちの、 | Zigomar | もつと凄惨な | 強烈な | 慵げに | 大通り | 鶯蛋 | 複雑 | 連想するならば | 聴いて | 遭つた | 元の語句 |
| 腕に絡まり | 而も | × | 媚笑 | フィルム of | × | Fantouma | もつと妖麗な | 突飛な | ぱつちりと | アゼニユウ | 皮蛋 | 混濁と | 連想するやうなら | 聞いて | 会つた | 加筆後 |
| 腕に絡まり | 而も | × | 媚笑 | フィルム of | × | Fantouma | もつと妖麗な | 突飛な | ぱつちりと | アゼニユウ | 皮蛋 | 混濁と | 連想するやうなら | 聞いて | 会つた | 初出『新小説』 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|----------|-----|--------------|--------|----|---------------|------------------|-----------------|---------------------|----------|--------|----|-----|---------|-----|------|----------|
| 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 |
| 30 | 28 | 27 | | 24 | | | | | 17 | 16 | | | | 15 | | | 14 | |
| 幾百万点 | 静かなのは | 此の町の人 | 列ねた | 此の騷擾に充たされて居る | 印度更紗の幕 | 魔術 | 町の人々に云はれたのです。 | まだ一遍も這入ったことがない | 魔術の看板を見に来るばかりで、 | 小屋の前を通つて、毒々しいペンキ絵の、 | 知つて居る筈だ。 | 心地がし | 言葉 | 鮮かに | どよめいて居る | 其の声 | 生々しさ | 肩を抱いて |
| 幾百万粒 | 正気な者は | 此の公園へ来る人 | 連ねた | × | 冷い鉄の門 | 魔法 | 町の人々が云ふのです。 | まだ一遍も中へ這入ったことがない | 小屋の前を素通りしましたが、 | 知つて居るに違ひない。 | 屢々あるのです。 | 眩ゆさを感じ | 話 | 精細に | どよめき渡る | 拍手 | 明白さ | 肩にしがみ着いて |
| 幾百万粒 | 正気な者は | 此の公園へ来る人 | 連ねた | × | 冷い鉄の門 | 魔法 | 町の人々が云ふのです。 | まだ一遍も中へ這入ったことがない | 小屋の前を素通りしましたが、 | 知つて居るに違ひない。 | 屢々あるのです。 | 眩ゆさを感じ | 話 | 精細に | どよめき渡る | 拍手 | 明白さ | 肩にしがみ着いて |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-----------|------------------------------|---------------|---------|--------------|-----------|-----------------|----------|------------------|----------------|----------------|-------------|----------|-----------|---------------------|----|------|
| 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 |
| | 53 | 52 | 50 | 49 | | | 47 | | | 46 | | 45 | 44 | 43 | 39 | 37 | 36 | 31 |
| 観れば | 線と色とを | 水だのと云ふものを | 物淋しい一廓 今歩いて来た繁華な街区を少し放れた、 | 白羽二重の羅衣の縁に接吻を | 「あなた、 | 云ひ捨てゝしまふのです。 | 感ぜられるのです。 | 一番楽しく、一番幸福に | 再三繰返すと | にこやかに笑つて居るのです。 | 大胆な女になつたかと思へば、 | 二人の縁を切つてしまふ方が、 | 失はずに居たのです。 | 私を愛してくれる | 心地がしました。 | あなた、魔術師の小屋は彼処にあるのよ。 | 彎曲 | 曲芸師 |
| 評価すれば | 線状を | 水だのを | 繁華な街区の果てにある物淋しい一廓 | 白衣の裾に長い接吻を | 「さああなた、 | 云ひ捨てゝしまひました。 | 感ぜられるでせう。 | どんなに楽しく、どんなに幸福に | 再三再四繰返すと | にこやかに笑つて居るばかりです。 | 大胆な女になつたかと思ふと、 | 二人の縁を切つた方が、 | 失はずに居たのでした。 | 私を愛して居る | 心地を覚えました。 | 魔術師の小屋は彼処にあるのです。 | 彎屈 | チャリネ |
| 評価すれば | 線状を | 水だのを | 繁華な街区の果てにある物淋しい一廓 | 白衣の裾に長い接吻を | 「さああなた、 | 云ひ捨てゝしまひました。 | 感ぜられるでせう。 | どんなに楽しく、どんなに幸福に | 再三再四繰返すと | にこやかに笑つて居るばかりです。 | 大胆な女になつたかと思ふと、 | 二人の縁を切つた方が、 | 失はずに居たのでした。 | 私を愛して居る | 心地を覚えました。 | 魔術師の小屋は彼処にあるのです。 | 彎屈 | チャリネ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|------------|---------------------------------------|--------|-----|--------|----|-----|------|--------|-----|-------|----------------|----------|--------|----|--------|--------|----|
| 73 | 72 | 71 | 70 | 69 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 |
| 86 | | 85 | 84 | | 80 | 76 | 75 | 72 | 71 | 65 | 64 | 62 | | 61 | 59 | 57 | 54 | |
| 卑しからざる | 私のために | 自ら奮つて私の魔術にかゝつて頂きたいと云ふ事を前以てお願いして置くのです。 | 御相談して | 局部 | 人間の体全部 | 客 | 呻つた | 集まつて | 斯う云ふ風に | 直ちに | 門まで | 断案を躊躇しました。 | 底の光りを、 | 取り返された | 怪物 | 其の礪々たる | 配置されて、 | 独特 |
| 卑しからぬ | 常に多勢、私のために | 自ら奮つて私の魔術にかゝつて頂く事を望みます。 | 御相談をして | 一局部 | 全身 | 観客 | 煽つた | 群つて | こんな風に | 直ぐに | 門の前まで | 断案を下すのに躊躇しました。 | 底光りを見せて、 | 取り巻かれた | 怪鳥 | × | 配置され、 | 特有 |
| 卑しからぬ | 常に多勢、私のために | 自ら奮つて私の魔術にかゝつて頂く事を望みます。 | 御相談をして | 一局部 | 全身 | 観客 | 煽つた | 群つて | こんな風に | 直ぐに | 門の前まで | 断案を下すのに躊躇しました。 | 底光りを見せて、 | 取り巻かれた | 怪鳥 | × | 配置され、 | 特有 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-----|---------------|------|---------|-----|----------------------------|-------|----------|--------|------|----------------|----|-----------------|--------------------|-----|------|-----|------------|
| 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 |
| | 95 | 94 | | 93 | | | | 92 | | 91 | 90 | | | 88 | | | | 87 |
| 蝶々となつて | 内で、 | 妖術を甘受しました。 | 凄まじい | 女の顔をした | 五分間 | 彼の女の体が孔雀の羽毛に蔽はれてしまふ迄には、 | 頷いて | その声を聞くと、 | 石膏のやうに | 有り難い | 云ひ渡しました。さうした後、 | 奴隸 | 再び其処に行者の如く畏まつて、 | 彼の女は夢遊病者のやうによろよると | ますく | さうして | 凄 | 魔術師の顔には |
| 蝶々と化して | うち、 | 妖術を施されて行くのです。 | 切ない | 女の顔を持った | 五分 | 彼の女の五体が全く孔雀の羽毛に蔽はれてしまふ迄には、 | 打ち頷いて | × | 石膏の如く | 歎ばしい | 云ひ渡して、 | 家来 | 再び其処に畏まりながら、 | 彼の女は夢遊病者の如くよろよるとして | だんく | 而も | 凄惨な | 青白い魔術師の顔には |
| 蝶々と化して | うち、 | 妖術を施されて行くのです。 | 切ない | 女の顔を持った | 五分 | 彼の女の五体が全く孔雀の羽毛に蔽はれてしまふ迄には、 | 打ち頷いて | × | 石膏の如く | 歎ばしい | 云ひ渡して、 | 家来 | 再び其処に畏まりながら、 | 彼の女は夢遊病者の如くよろよるとして | だんく | 而も | 凄惨な | 青白い魔術師の顔には |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------|------------|-----|-------|-------------|---------|-------|-----|----------------------|-----|-------|--------|----|------|-----------|------------|----|----------|
| 111 | 110 | 109 | 108 | 107 | 106 | 105 | 104 | 103 | 102 | 101 | 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 |
| 103 | | | 102 | 101 | | | 100 | | 99 | | | | 98 | | | 97 | | |
| 私は負けたに違ひない | 変らないのに、 | 負けてしまいました | 放れた | 驚かされて | お前の足に絡まつて居る | 聞えました。 | 沈黙の空気 | 見渡す | 如何に幸福な、如何に満足なものであるかは | 満足 | 無限と悦楽 | 未だに | 変化 | そんなに | 形態に対して、 | 舞台へお上りになる方 | 此れ | と云ひました。 |
| 成る程私は負けたに違ひない | 迷はないのに、 | 負けてしまったのです | 離れた | 誘はれて | お前の足に穿いて居る | 聞えたのです。 | 沈黙の底 | 見廻す | 如何に幸福を感じて居るかは、 | 歡喜 | 無限の悦楽 | 彼等は未だに | 変形 | それ程 | 形態と云ふものに、 | 犠牲者になる方 | 其れ | と云ふのでした。 |
| 成る程私は負けたに違ひない | 迷はないのに、 | 負けてしまったのです | 離れた | 誘はれて | お前の足に穿いて居る | 聞えたのです。 | 沈黙の底 | 見廻す | 如何に幸福を感じて居るかは、 | 歡喜 | 無限の悦楽 | 彼等は未だに | 変形 | それ程 | 形態と云ふものに、 | 犠牲者になる方 | 其れ | と云ふのでした。 |

| | | | | | | | | | | | |
|----------------------|------------|-------------|-------------|-----|----------|--------|---------|-----------|----------------|------|-----|
| 123 | 122 | 121 | 120 | 119 | 118 | 117 | 116 | 115 | 114 | 113 | 112 |
| | 108 | | 107 | | 106 | | | | 105 | 104 | |
| 飛んでも跳ねても離れないやうにして | 化けてしまひました。 | 半羊神になつたのなら、 | 捨てないのです。 | 直ぐに | 追ひかけて、 | 消え失せて、 | 出たのです。 | 私の両脚には | ピシリと打ちました。すると、 | 魔術師は | 目標 |
| 二つの首は飛んでも跳ねても離れなくなつて | 化けたのです。 | 半羊神になつたら、 | 捨てる事が出来ません。 | 惶てゝ | 追ひかけながら、 | 消えて、 | 現れたのです。 | 見るゝ私の両脚には | 一と打ち打つと、 | 魔術師が | 問題 |
| 二つの首は飛んでも跳ねても離れなくなつて | 化けたのです。 | 半羊神になつたら、 | 捨てる事が出来ません。 | 惶てゝ | 追ひかけながら、 | 消えて、 | 現れたのです。 | 見るゝ私の両脚には | 一と打ち打つと、 | 魔術師が | 問題 |